# 分岐点①

## 序章

Lavendula

世の理不尽、幾千年過ぎようと尽きることなし。
因果応報当てにはできず、勧善懲悪とうに廃れたお伽話。
虐げられた者たちは口を閉ざし己を殺すことを強いられる。
要領良く他者を取捨選択する者だけが偽善者面で世にはびこる。

腐った世界に救いはなく、自ら始末をつける者は後を絶たない。
刃を向けるのは己か敵か。
どのみち末路が同じなら‐。
そう例えばこの－嘉納宥宗のように。

宥宗は今病院の一室へ向かっていた。
動きやすさだけを追求して選んだゴム底の靴は、磨き抜かれた
病院の床と接触してもぺたりとした感触しかせず、殆ど無音だ。
染毛していない真っ黒な髪は短く刈り揃え、着ているセーターも
ジーパンも極めてシンプル。アクセサリーを身に付けたことは、
生まれてから数える程しかない。地味な印象を持たれがちだ。
それは宥宗本人も自覚している。顔の造形はアーモンド形の
切れ長の瞳に、筋の通った小さく整った鼻と薄い唇と、少し
派手さよりも、大人びた憂いを含んでいる為、いつも年齢よりも
年上に見られる。だがこうした飾り気のなさは、決して趣味志向
ではなく節約に根ざしている。

清潔感さえあればそれで良い。今の宥宗にとっては、一時の贅沢
よりも少しでも早く手に職をつけることが最優先事項なのだ。そんな常に
資格取得の為の勉強とアルバイトに追われている宥宗が、平日の昼間に
学校にもバイトにも行かないで病院にいるのには理由がある。
大学の先輩、土岐等あかりの見舞いの為だ。

もともと持病を抱えていたあかりが大学で発作を起こし、緊急搬送された
のが一週間前。生命の危機は脱し、集中治療室から一般病棟へ移された
ものの今日に至るまで意識不明の状態が続いている。今では毎日見舞いに
来るのが宥宗の日課となった。毎日のことなので見舞いの花も持たず、
前日に気がついた必要なものを見繕っては持ってきている。それまでは
利用したことのないバス路線を使って病院へ来るのにも、宥宗は少しずつ
慣れてきた。

慣れない路線のバスから見る景色。
機能性と現代アートの調和を追求した病院の
外観。共感と微妙な距離感を纏う病院特有の関係性。

これは慣れた。だが昏睡状態のあかりという現実だけは、受け入れがたい
ものがあった。モノクロの悪夢のような心もとなさが支配するリアル。
院内の照明は残酷な現実をくっきりと照らし出す。
扉の脇のネームプレートは、受け入れがたいリアルの実在を示していた。

病室入口の脇にある機械で手を消毒してから、宥宗は病室のドアを
軽くノックして開けた。ベッドの横ではあかりの母親照子が虚ろな目で
雑誌に目を通していた。

看病で疲労が溜まっているだろうに、きっちりと髪を後ろにシニヨンを
結い、ピンでほつれ毛を固定しており、服装にも気を抜かない。宥宗が
挨拶をすると朗らかな声と笑顔で返してくれた。あかりとは違い切れ長の
目は細められていることが多いので、凹凸の少ない顔は見る者に柔和な
印象を与える。

眠っているあかりにも挨拶をすると、照子は椅子を勧めた。
その横顔には、くっきりと隈が浮き出ている。
あかりの容体が心配で満足に睡眠すらとっていないのだろう。

あかりの病室は個室で、ベッドの他には小さな手洗場と、パイプ椅子が
幾つか立て懸けてあるだけの簡素な造りだ。見舞客宿泊専用の部屋などは
なく、病院から貸し与えられた布団一式が部屋の隅に置かれている。
照子はそこで睡眠を取っている。トイレは病室の外にある共用トイレを
使用し、シャワーに至っては患者のみしか使用できないので、照子は
銭湯を利用している。自宅が遠方にある照子は、その都度自宅に帰る
こともできない。

照子は決して口に出さないが、宥宗は目に見えてやつれる照子を案じ、
幾度か宥宗の自宅を宿泊に使ってはどうかと提案した。だが照子は
その度に、あかりに万が一のことがないか心配だからと断る。
だから宥宗は照子の気持ちを組んだやり方で、手伝う方法を試行錯誤
している。

椅子に腰かけた宥宗は、照子に病院の食堂に行くよう勧め、交代を
申し出た。これも既に恒例の役割分担となっている。その度に照子は
毎回礼を言う。今日も照子は礼を言うと、財布を手に病室を後にした。
その足取りはやはり心もとない。

それでも遠方で仕事を持っているというのに、照子は決して看病を
代わってくれと口にすることはなかった。それこそ母親の愛情なのだろう。
長年母と子二人で築いてきた絆はやはり大きい。
母親思いのあかりが目を覚ましたら、さぞ心配することだろう。

それだけに一層宥宗は許し難く思う。

あかりが入院することになった元凶ども－。
あかりを取り巻く医療機材の数がその罪深さを知らしめる。
持参した本のページを捲っても、奴らの下卑た顔が脳裏から離れない。
全く関係の無い単語を拾っては、今まで受けてきた事象と無作為に
結びつけてしまう。文字の羅列は無意味に通り過ぎ、頭に入ってくる
ことはなかった。諦めて本を鞄に戻す。日差しの暖かさに外を眺めれば、
病院の窓越しに映る小学校の校庭では、男子児童たちが懸命にボールを
追いかけている。控えめな陽光は風景を柔らかく包み込み、病室は
さながらあの汚い世界からかけ離れた別天地だ。

この一週間、宥宗はあかりの容体だけを案じていた。意識不明だが
ようやく小康状態が訪れた今、今回の事態の発端を明らかにする

必要があった。

宥宗は目線をベッドに据える。彼女は、あかりは細い腕に刺した点滴で
命をつなぎ、胸と胸にも機材を付け、その生命の動きを逃すまいと計測
されている。ただでさえ細身の体が心なしか一回り小柄になった気さえする。
セミロングの黒髪がわずかに伸びて、命が存在することを示している。
その存在を確かめようと頭を撫でようとしても、頭部を覆う機材に邪魔され、
それすら叶わない。あくまで白い肌と、筋の通った少し丸めの鼻と小さく
整った唇。はっきりとした顔立ちは華奢にも見えてあかりという存在を
一層儚くする。

好きだった意思の宿った大きな瞳は固く閉じられ、もう二度と
開かないのではと不安を誘う。宥宗はせめてもと点滴針を刺していない
右腕を撫でようとした。だがモニターから発される規則正しい音が乱れた
気がして、一瞬手をひっこめた。

少しでも動かすと容体の悪化に繋がりそうで、宥宗は指だけでそっと
なぞるだけにした。

「ゆっくりお休み。眠るのに飽きたら、目を開ければいい。
こんなのは……理不尽すぎる」

最後の言葉を吐くと、宥宗は唇を噛みしめた。

幼いから心臓に持病のあったあかりは、急な発作に備え常に症状を
緩和させる錠剤を携帯していた。いつも鞄の内側のポケットに
入れている。最近は発作が増えたから、錠剤を使用したら必ず補充する
よう特に気を付けているとあかりは言った。宥宗も会うたびに確認し、
実際一度でもあかりが忘れたことはなかった。それが今回に限って
所持しておらず、突然の発作に対処できなかったというのは、いかにも
不自然に思えた。

常備している薬は発作十回分相当にあたる。薬が足りなくなったとは
考えられない。そもそもここ数年なりを潜めていた発作が最近になって
頻繁に起こるようになったのも、極度の心的ストレスによるものだと、
宥宗は推察している。状況証拠しかないのがただ口惜しい。
だが確証に近かった。

心的ストレス－それは指導教官からの悪質なアカデミック・ハラスメントに
起因している。当のあかりは事実を断片的にしか語らなかった。
セクハラに端を発しているらしく、詳細には言いたくなかったのだろう。

それでも心配する宥宗に請われ、あかりは幾つか事実を話してくれた。
初めはその指導教官は過剰とも言える程あかりに目をかけ、それが
ある日を境に、突然嫌がらせに転じたと－。

日を追うにつれ、指導教官だけでなく、同じ研究室の学生たちからも
嫌がらせを受けるようになったことも、悔しそうに俯きながら話して
くれた日を宥宗は思い出す。そんな針の筵のような研究生活でも、
あかりは尋ねなければ自分から不満を口にすることもなく、毎日研究を
進めることに邁進していた。院生にもなって、そんな低レベルなことに
巻き込まれているという事実を、認めたくなかったのかもしれない。

だが修士論文を理不尽な理由で二回受け取り拒否をされ留年を
強制されている時点で、不合理な取り扱いを受けているのは明白であった。
その為に内定していた会社への入社を見送ることになり、奨学金も
打ち切られた。同じ会社に今年も内定をもらったというのに、今年も
受け取りを拒否された。

もちろんあかりは抗議し理由を尋ねているが、意味の分からない
理屈をこね、最後には逆切れを起こして癇癪を起してでも、受け取りを
拒否した。

論文の内容に問題がないのであれば、そんなに目障りな学生などさっさと
卒業させてしまった方が、教授にとっても都合が良かろうと思う宥宗には、
初めその教授の真意が全く分からなかった。だが最近では中退を促して
いるのではと推測している。修士論文を提出できる年限は単位取得後一年と
決まっている。あかりの場合、あと一年しかない。おそらく来年も受け取り
拒否して、結局学位を渡さないか、その間に中退でもすれば万々歳と
考えているのであろう。当然就職活動に悪く響くことは織り込み済みの
はずだ。そこまでして学生の人生を壊したがる理由は分からないし、
理解できるはずもないが、底知れぬ悪意だけは匂い立つ。

それに加え無償で教授自身の研究の資料集めに、授業の手伝い、更には

あかりが苦労して採取した実験データの提供を強要してくる。あかりは
淡々とそう言っていた。断れば教授に気に居られたい学生たちから、
「空気が読めない」「非協力的だ」と誹りを受ける。結局半ば奪うように
データを奪われ、その結果を教授の名前で発表される。もちろんあかりの
名前は共同研究者にすら入っていない。代わりに名前を連ねているのは、
教授のごますり学生だ。

　それでも外部から見れば留年を重ねている劣等学生に見えるらしく、
幾度も悔しい思いをしたと、一度だけあかりがこぼしたこともあった。
あかりが語った事実はこれだけだが、他にもあるのかもしれない。
そもそも規定の単位は取得しているので、本来はあかりが
研究室へ行く必要はない。それでもアルバイトをする時間を奪ってまで
不公平な配分で研究室の仕事を手伝うことを強要する。
全てこの指導教官が勝手に創り出した慣行だ。

ともあれ異常な研究生活が心的ストレスを与えていたのは確実で、
専門書によればストレスが病状を悪化させる大きな要因になりうるとある。
主治医もできればストレスのない生活を心がけるよういつも言っている。
事実あかりの発作が　再発したのは、修士課程に入学して五カ月が
経過した頃からで、宥宗の記憶が正しければ一連の嫌がらせが行われる
ようになって2ヶ月目のことだった。

初めての発作は研究室で、実験データを採取中に起こった。十年ぶりの
発作であったが、万一に備えて常備していた薬のおかげで大事には
至らなかった。母親を一人にしないよう、常に薬を持ち歩いていた
おかげだとあかりは言った。
「お母さんに感謝しないとね」
疲れた眼差しにすら温かい光が眼奥に宿っていた。
それからあかりの発作の間隔はみるみる狭くなり、薬の補充には
それまで以上に気を付けていた。だから‐ありえない。絶対に。

ではなぜ薬がいつもの場所にない？
あかりは毎日宥宗の資格試験の勉強を見てやっていた。もちろん
倒れた日も。教授に呼び出された１時前、12時30分過ぎまで見てくれて
いたのだ。その日も宥宗は薬がちゃんとポケットに入っているのか、
一緒に確認している。
確かに薬はポケットにあった。
いつも薬を入れている鞄の一番内側のポケット。思いついて鞄を
全て調べたが、筆記用具、ノート、ファイル、携帯電話、本などいかにも
学生らしい持ち物は出てきたが、薬はなかった。
薬ケースも。錠剤の一つも。
状況が一つの方向を確実に示している。だがそこまでやるだろうか。
敵意を見せない無抵抗の人間に、そこまでする理由が。

純然たる悪意の現存を信ずるほどには、人生に絶望をしたくない。
生身の人間に対する、宥宗の最後の期待だった。

「嘉納君、ありがとう」
しばし思案していると、照子がレストランから戻ってきた。
「はい、これ」と小さなペットボトルの緑茶を渡され、礼を言うと宥宗は
照子と共に一服をすることにする。
非社交的な宥宗には、こういうとき気の利いた言葉が出てこない。
だから黙って茶を口に運ぶ。あかりと会って少しは改善したはずだが、
根本の部分でまだ治っていない。暗いと思われたかとちらりと横を伺うと、
照子と真正面から目があってしまい、慌てて目を逸らす。変に思われたかと
またもや気にしていると、照子はくすくすと笑いだした。

「嘉納君って、本当に正直な人ね。表情に直ぐ出るんだもの」
「そうでしょうか……。初めて言われました」

暗いとか、何考えているのか分からないとは言われたことは幾度もある。
でも正直なんて言われたことは、今回が初めてだった。

「そんなに緊張しないで。私ね、嘉納君が毎日来てくれて本当に嬉しいの。
あかりのこと、本当に大事に思ってくれているのが分かるから」

何と返していいのか分からなかった。
宥宗とあかりの関係も、照子がどう捉えているのか分からない。
大学の先輩後輩関係以上の信頼関係はあるが、その関係性を言葉で表す
のは難しい。
それに、そもそも宥宗は褒められ慣れていないのだ。妙に気恥しい。

「……はあ。気の利いたことが言えなくて。すみません。つまらないですよね」

「ううん、全然。嘉納君は、表情や行動でちゃんと示してくれるもの。
見ていて飽きないわ。それに私の話をちゃんと聞いてくれる。無理しなくても、
私は十分楽しい」

耳慣れない言葉に本気で言っているのだろうかと一瞬身構えてしまうが、
その目が真剣なのを見て取ると、今度こそ気恥しさで俯いてしまう。
だが心中は浮き立つような不思議な高揚感を感じていた。慣れないこの
気持ちを伝えたくて、鞄から木箱を取りだした。

「これ、あかりさんが好きな曲なんです」

箱を開けると流れる、少し前に流行ったゴスペルをオルゴール用に
アレンジした曲。意識を失った人に音楽を聞かせたり、積極的に話をする
ことで、脳に刺激を与えることができると本で読んで早速持ってきたのだ。
静かで懐かしく、それでいてサビのメロディーでは聴く者の心を揺さぶる
激しさを秘めている。

「……いい曲ね。ほらあかり、あなたの好きな曲よ」

照子は宥宗からオルゴールを受け取ると、あかりの耳元に寄せた。

荘厳な旋律は殺風景な病室すら、神聖な空間へと変えていく。照子は
目を覚ます儀式かのように何度も螺子を巻き直しては、音楽を聞かせていた。
優しげな音色が創り出す異空間は、猥雑な日常を隔離してくれる。雰囲気に
従い、自然宥宗は祈った。真剣に祈った。神様は散々宥宗に我慢を
強いてきた。だから今度は神様が忍耐への報償を与えるべきだ。
今までの貸しは返してもらう。

ひたすら忍従を強いられた人生でやっと出会えた光 - それがあかりだった。
だから最後の希望だけは、奪わないでくれと。

膝の上に隠すように手を組み、目を閉じ祈る宥宗を、照子は目じりを
下げて見つめていた。窓の外では名も知らぬ小鳥がチリリと、新たな
季節の到来を告げていた。

「あかりさんは？　今はどんな容体ですか？」

照子から連絡を受けた宥宗は、あかりが再び危篤状態に陥ったと
聞き、バイト先から直行した。受付で身分を名乗ってあかりの居場所を
訪ねると、待合室に案内された。
待合室は一般病棟から離れ、手術室からほど近い場所にあった。
遠くから夕飯の後片付けの喧騒の音がかすかに聞こえてくる。

待合室は簡素なパイプ椅子と、四角く白い凡庸な見た目のテーブル
のみで随分と殺風景に感じた。インテリアと言えば製薬会社から
もらったらしき、カレンダーのみ。それでも時間潰しにとブック
ラックには草臥れた週刊誌や漫画が用意されており、テーブルの
上には造花が飾ってある。清潔が行き届いていて、それが却って人工的に
過ぎるように感じられる。その中に憔悴しきっている照子の姿があった。

受付では担当医師が直接話をするとのことで、あかりの安否は未だ
知れない。母親の照子によると突如体中に付けていた計器が異常を
示し、慌てて看護師を呼んだところ緊急手術となったとのこと。
詳しく尋ねている時間はなかったようだ。
幾度か顔を見せに来た祖父母ももうすぐ到着するという。真っ赤に
晴らした目は最悪の事態を覚悟して震えている。悪夢のように現実味が
ない中、宥宗は思いつく限りの言葉で照子を励ました。照子は
「ありがとう」と繰り返すばかりであった。最後には沈黙になる。
いくら言葉を継いだところで、根拠のない言葉は空々しく響くだけだ。

悟った宥宗は、せめてもと神に祈りを捧げる。今まで数え切れぬほど
祈り裏切られてきた神様。今度こそ、いや今度ばかりは願いを聞き届けて
欲しいとあの時ベッドサイドで訴えた以上に心をこめる。
静寂が支配するこの部屋では、掛け時計が秒針を刻む音がやたら
耳についた。

　見遣ると既に時刻は八時を回っている。あかりの危篤を知らせる連絡が
あった時刻が午後七時過ぎ。学校も仕事もとうに終わっているはずの時刻。
息子が順調な研究生活を送っていると信じている照子は研究室に連絡した
と言ったが、それでもこの一時間近くの間、駆け付ける人間は独りとして
いない。宥宗は組んだ手に一層力を込めた。

しばらく待合室で担当医師を待っていると、照子が幾度も咳き込んだ。
このところ寒い日が続いている。看病疲れもあるはずだ。風邪でも引いたら
一大事と、宥宗は温かい飲み物を病院内のコンビニで買うことにした。
もうすぐ到着するという宥宗の祖父母にも、飲み物と軽食を購入する。
戻ってくると頬を紅潮させた初老の男が待合室へ入っていくところだった。

（あれは……）

「この度は誠に……。私は土岐等さんの指導教官の山瀬です」

足音を忍ばせてドアに耳をつける。廊下には男のアルコール分と
柑橘系の臭いの入り混じった息の残り香がふわりと鼻を掠めた。
シャッターの下りた隙間から部屋を覗き込むと、男が胸ポケットから

すかさず名刺を差し出しているところであった。細いが引きしまった体を
スーツに包み、持っている鞄もこ洒落たビジネスバッグ。
顔立ちも整っている。外見だけは紳士然に見える。宥宗と入れ違いに
到着した祖父母たちは、恭しくその名刺を押し頂いた。

　反射的に宥宗は身を隠す。山瀬の本性を知る身としては、今この場に
いることを知られる訳にはいかない。いずれ研究室内で行われていた
アカデミック・ハラスメントに関する事実の調査に備えて、宥宗の顔を
今知られる訳にはいかなかった。

　今までもあかりへのハラスメント行為を黙って見過ごしていた訳ではない。
同じ学部の学生でありながら、宥宗は大教室での授業以外には顔を
知られないように気を配り、陰ながら山瀬の本性を示す証拠集めに
奔走していた。大学を動かすには、山瀬が言い逃れできない程度の
証拠固めが必要だった。

　以前にあかり自身も学内の相談所に幾度も訴えたが、事を荒立てない方が
良いと諭すだけで、全く頼りにならない。それどころかあかりをトラブル
メーカー扱いする始末。動かぬ証拠が必要だった。

ここで関係者であることが露見するのは得策ではない。
身を隠しながら宥宗は戸の陰から様子を伺う。薄い扉ごしに内部の声が
籠って聞こえる。プライバシーに関してはいささか心配だが、今日ばかりは
この薄い扉にあかりは感謝した。

三人はそれぞれ簡単に自己紹介をし、照子は宥宗の正確な状態は未だ
知れないことを伝えた。「嘉納君はどこに行ったのかしら？」と
照子が口にしたときには焦ったが、血縁者の一人と思ったのか山瀬が
それは誰かと問い詰めることはなかった。

　待っている間、山瀬は「土岐等さんは病気を抱えながらも、研究を
がんばっていましたよ」と答えた。その体調を悪くしたのは誰だと怒りで、
今にも飛び出して面罵したいくらいだ。だが宥宗はぐっと堪えた。
今この姑息な男を罵るのは容易い。だが狡猾なこの男はいかにも難癖
つけられたかのようなポーズをとることは容易に想像がつく。
宥宗は歯がみしつつ事態の推移を見守ることにした。

「ちょっと失礼します」と山瀬は席を外し、廊下から学部長に電話を
かけた。廊下の脇に隠れていたあかりには、会話の内容は筒抜けである。
巧妙に学生の身を案じる教員を演じる語り口に、吐き気すらする。
だが証拠はあかりの証言しかない。信じられるのがこの世であかりだけに
等しい宥宗にとって、彼女の言葉はまごうことなく真実であるが、
万人がそうであると思い込めるほど盲目ではない。

　通話が終わり待合室に戻ると、言い訳のつもりなのか、山瀬は近頃の
教員業務の多さをひとくさり語り出した。そして看護師が医師の到来を
告げに来ると、医師がこちらへ向かう足音を意識してか、こう締めくくった。

「もう少し多忙でなければ、毎日でも来るのですが」

山瀬の言葉に宥宗は胸がざわめくのを感じた。

「一時は危険な状態に陥りましたが、なんとか持ち直しました。
ただ申し上げにくいのですが、意識は未だ回復しておりませんし、
いつ意識が戻るのかも分かりません。意識が戻るという保証も……
現段階ではできません」

危篤状態になる前と同じ不安定な状態。それでも家族は命が救われた
ことに感謝をし、未来に希望をつないだ。
「でも意識が戻らないと決まったわけではないんですよね、先生！
本当に、本当にあかりの命を救ってくれてありがとうございました」

照子が幾度も感謝の気持ちを述べるのを一通り聞いた後、医師が
言いにくそうに告げる。

「ですが……。後遺症が残るかもしれません。それは覚悟してください」

結局宥宗は同席しないまま、山瀬とあかりの家族は一緒に医師の説明を
受けた。宥宗が廊下にいることに気付いた看護師が中に入るよう
促したが、適当な理由をつけて入らなかった。その間も中ではあかりの
容体を巡って、事態が一刻一刻と変化している。何とかならないのかと
医師に詰め寄る陳腐なパフォーマンスをする山瀬を制して、家族は今
自分達に出来ることを尋ね、メモに記していた。

医師の説明によればあかりには後遺症が残る可能性が大きい。医師を
責めても結果は変わらない。その時間を使って他にやることがあるはずだと、
家族は判断した。今後のケアにもあかり自身のためにも必要なことであり、
賢明な判断だ。それ以降山瀬の不快な声は聞こえなかった。所詮
パフォーマンスに過ぎないのだとあかりは確信した。担当医師は
経験豊富そうなベテランで、こうした事態にも慣れているのか、
幸いにも山瀬の不躾な態度にも不快感を示すことはなかったのが救い
だった。

中で医師が細かな説明をしている間に、ＩＣＵからあかりが運ばれて
くるのが見えた。ストレッチャー上のあかりは完全に寝入っているように
見える。廊下に居た為宥宗は、図らずも家族よりも先にあかりの姿を
見ることが出来た。あかりを乗せたストレッチャーが前と同じ個室に
吸い込まれて行く。廊下から覗いているとスタッフが手際よくあかりを
個室ベッドに移している。そろそろ消灯前とあって、歯磨きや
トイレへと患者たちが動き出す時間帯であることもあり、物珍しそうに
見ている野次馬に紛れていた為、特段宥宗だけが怪しまれることは
なかった。

ベッド上のあかりは手術前と何ら変わらない。ちゃんと目の前で
息もしている。「後遺症」の三文字が脳のどこかで点滅するが、
ひとまず宥宗は安堵した。

そうこうしているうちに、聞きなれた声が耳に入り、慌てて近くにある
患者用トイレに駆け込む。あかりの親族にも妙に思われているだろう。
山瀬が帰ったら姿を現そうとタイミングを伺うことにする。
そっと個室に面した廊下を覗きこむと、薄く開いた扉の中から医師が
話す声が、漏れ聞こえてくる。医師が一通り説明を終え出ていくと、

少したって祖父母も病室を後にした。照子も携帯を片手に後を追う。
職場への連絡が必要なのだろう。既に一週間以上経過している。
そろそろ職場での進退を決しなければならないのかもしれない。

　ならば今現在中に居るのは、山瀬だけということになる。意識不明の
患者にまで手を下すことはないと信じたいが、やはり心配でならない
宥宗はいっそのこと病室に踏み込もうか、いやそれでは今後に差し支える
と煩悶した上で、こっそり病室を覗き監視するという中途半端な決断をした。

「……ごめん、ごめん。すぐ済むと思ったんだけど。うん、また来ないと
いけない。……そう言うなよ、査定にも響くんだよ。祖父母まで
来ていてさ。本当にどれだけ手間をかけさせるんだよ」

がしっと金属を蹴飛ばす音がする。宥宗は幽霊にあったかのように
心の芯が冷えていくのを感じた。山瀬は聞かれているとは想像だにして
いないのか、個室にいる安心感で大きめの声で会話している。

「まあ今日は泊る。仕方ないだろ、あと『少し』なんだから」

宥宗は、あえてバタンと音を立ててドアを開けた。もう我慢が
ならなかった。

　山瀬はぎょっとした様子で急いで携帯を切り、何食わぬ顔で「えっと、
弟さんかな？　私はお姉さんの指導教官の山瀬。心配なので、私も今日は
ここに泊るよ」としれっと言ってきた。
「……」
言葉が出なかった。聞かれている事を知らぬとは言え、よくも。よくも
何事もなかったかのように振る舞えるものだ。宥宗は目の前の男が、
悪魔にしか見えなかった。

無言で怒りに青ざめる宥宗を、どう解釈したのか、突然の出現者を
もてあましているのか山瀬は煙草を吸ってくると出て行った。これほどの
怒りをどう制御すれば良いのか分からず、宥宗は無言で振り向きもせず、
丸椅子を引き寄せ座る。意識がないはずのあかりの閉じられた瞳から、
涙がこぼれおちた。

「運が悪かったのね。常備薬が無い時に限って、発作が起こるなんて……。
あの子は慎重な子だったのに。偶々忘れた時に限って」

照子は疲れた顔で、ぼんやりと呟いた。

既に手術後一週間が経過していた。
悪夢のような山瀬の訪問の衝撃も、その輪郭が薄れてきている。
決して忘却することのない存在は、曖昧なまま放置してある。
刺さったままの棘が突き刺す傷は深いまま、いや深いが故に手を
出しあぐねる。傷を気にしての日常は、じんわりと身体に
浸み渡り、傷を体の一部へと風化させようとしていた。

あかりの症状が悪化することはなかったが、好転する兆しも
見えず、看病する側にも疲労が色濃く見える。病院が完全看護体制
であることと、職場の都合で照子が病院に来る回数は減っていた。
医師と相談の上、あかりの実家がある県内へ転院することも
視野に入れていると言っていたが、移動途中で緊急状態になる
可能性も考慮して、あかりの容体がもう少し好転するまでは、
今の状態を続けるしかなかった。

完全看護体制のある病院で、自宅の近所の病院を探すと言うので、
照子にとっては時間がいくらあっても足りない。

勿論宥宗は進んで手を貸し、病院情報の収集から見舞いまで
考えられる限りの手伝いを、進んで申し出ている。職場から直接
やってきた照子は、移動だけでも体に堪えるはずだと慮ってのことである。
それでも週末くらいはと、照子は無理を押して今日もやって来た。

（偶々……本当に悪い偶然が重なっただけなのか？）

　あかりが倒れた日。

　あかりは、研究棟の地下会議室前の廊下で発見された。
研究棟は、地下二階から地上三階まである垂直に長い構造で、
地下に降りる階段とエレベーターは入口脇にある。

地下一階は備品室や薬品庫など、実験に使用するものを保管する
部屋が配置されている。実験室は学生の研究室に近い場所にあり、
使用頻度の高い機材は実験室横の準備室に置かれているので、
ここまで来る学生や教員は少ない。

一方あかりが発見された地下二階は大会議室になっており、
イベントがある時のみ使用され、それ以外は施錠されている。

地下一階の施設には劇薬も保管されている為、各部屋ごとに
入室者はリストに名前と所属を明記することが義務付けられている。
地下二階も普段は施錠されているので、エレベーター内の防犯カメラ
以外には、地下へ行こうとする人間を識別する方法はない。

あかりは地下二階の廊下で倒れているところを発見されたのだが、
地下二階の利用者はもともと少ない事実に加え、各階のドアが厚く音が

内外ともに漏れにくい構造であったこともあり、発見が遅れた。

部室を持たないダンス部の学生が内緒で練習しようと、地下を訪れ
なかったら、本当にあかりは命を失っていたかも知れない。

ここで疑問が生じる。

論文の指導という名目であったのに、どうしてあかりは地下にいた
のか。そもそも受け取り拒否をした論文を、今更指導すると言いだした
時点で宥宗は不安を感じていた。
そこにほの暗い意図があるのを察したからだ。

心配する宥宗に、あかりは証拠保全も含めて連絡をまめにすることを
約束していた。予定が変わったのであるならどうして携帯メールを
くれなかったのか。

予定の時間から一時間後に倒れたあかり。

一時間の間何をしていたのか。

指導していたはずの山瀬はなぜ書庫にいなかったのか。

山瀬を怨んだ。山瀬は、今までもあかりにだけ研究室内業務に
応じたポストを与えず、聞こえるように悪口を言い、内容に
関わらず論文を差し戻してきた。アカデミック・ハラスメントに
該当する行為の見本市のようなことを繰り返してきたと言える。

普段から怨んでいるせいか、山瀬に非があるとしか思えなかった。
だが証拠はない。限りなく人為的な不幸な事故なのか。

「常備薬は、いつもは鞄のここに入れていたんですけれど」

そう言って、鞄の内ポケットを再度検めると、ぐにゃりとした
感触がした。慌ててポケットの中を引っ張り出すと見慣れた
キーホルダーのついたビニールの薬袋があった。

「……どういうこと？」

手術当日まで確かになかった。目覚めた時の為に、
いつも薬を入れていたここに携帯電話を入れておいたのだ。

代わりに携帯電話がなくなっている。嫌な予感が背筋を伝う。
まさか山瀬が。いやそれは考え過ぎのはずだ。卑劣で最低な人間だが、
リスクは犯さない人間だ。

嫌がらせも同じ研究室の人間以外の目につかないところを
選んでやっている。

　だがあの携帯にあった情報から鑑みれば……。内ポケットを
無意味に動かしていると、照子は不思議そうな顔をして言った。

「それ、発作の時のお薬じゃ……」

「はい。昨日までなかったのに、今になって出てきました」

「そうなの？　今更出てきてもね」

　荷物を整理するときにあかりの鞄を触ってはいたが、その
中身は確認していないのだろう。鞄のポケットからなかったはずの
薬袋が出てきたといったことを、不審に思うこともなかった。
今宥宗が抱いている感情などついぞ想像だにしていないのだろう。

「代わりに携帯電話がなくなっています」

「ああ、じゃあ運ばれる時に落としてしまったのね」

　のれんに腕押しのように、手ごたえの無い感想だった。

いや普通はそうだろう。照子はあんなどろどろとした悪意渦巻く
場所が、この世にあることすら想像もつかないに違いない。

いっそあかりが被っていたアカデミック・ハラスメントの実態を
打ち明けてしまおうか。だがあかりが照子に話していないところを
見ると、心配をかけたくなかったのかもしれない。悲しみに暮れる
照子に追い打ちをかけるようなことをするのは、やはり気が引けた。
だが……このままでは。

　難しい顔をして黙りこむ宥宗を、照子は不思議そうに
見つめていた。

　「……山瀬先生を病室に入れないでください」

　宥宗は意を決して照子に、山瀬との接触を避けることを進言した。
　家族でもないのに、傲慢かもしれない。不安はあった。宥宗には
　何の権利も、目に見える関係性もない。

　「どういうこと？　山瀬先生との間に何かあったの？
　もしかしてそれでこの前の手術の時に席を外していたの？」

　唐突な申し出に、照子は小さな目を丸くする。
　いつもは落ち着いている照子が珍しく矢継ぎ早に質問を
　投げかけた。

　「それは……」

　それでもあかりの意志を確かめられない以上、宥宗が独断で
　アカデミック・ハラスメントの事実を伝えても良いものかと口
　籠った。被害者なのに自分が嫌がらせを受けているというだけで、
　理不尽なスティグマを植えつけられる。

　　ハラスメント被害者であるという告白は、この疲れ切った人に
　更なる追い打ちをかけること。言いだしたくせに、宥宗は先を
続けられなくなった。

　「無理して言わなくてもいいわよ。……ただねえ、山瀬先生が

学生さんたちとまたお見舞いに来たいとおっしゃるから、
承諾しちゃったの」

聞いていない。

「それはいつなんですか？」

震えそうな声を振り絞って聞く。しかも照子は宥宗が山瀬と
上手くいっていないと推測しているようだ。

「明日よ」

今度は宥宗が目を丸くする番だった。

　　数日後 - 忌々しいことに他の研究室メンバー達が、
常識人面してやってきた。殊勝ぶって土産物を持ってきているが、
こいつらはアカハラを傍観するか加担するかした、加害者だ。
隠れて様子を伺う宥宗の気分は悪くなる一方だった。

照子は詮索することなく、自分が応対をするので宥宗は
来なくていいとだけ言った。あの手術の夜の行動から、ただならぬ
背景があることは感じとったらしい。照子の気遣いには感謝
したが、宥宗は山瀬たちの動向が不安なので遠くから監視する
ことにした。少しでも怪しい行動をすれば、
今度こそ現場を押さえるつもりだ。

しかもこのうちの一人は、研究室内の嫌がらせであかりが
初めて発作を起こした時に、「迷惑だから余所でやってくれ」と
言ってのけた奴だ。今は博士課程に進学し、引き続き嫌がらせを
続けている。よくも顔を出せたものだ。宥宗があかりなら
呪ってやるところだ。ホームページで顔を載せているので、
直接は面識がないが、そのふてぶてしい顔はしっかりと脳裏に
焼き付けている。他の奴らも同じ。教授とそれにこびへつらう
学生たちが繰り返し嫌がらせをするのを、黙認し火の粉が
降りかからぬよう接触を避けている。

　だが意図が分からなかった。単なる対外的アピールなのか。
これは他のメンバー同士の会話で容易に推測できた。学部生、
つまり部外者である宥宗にとって内部事情の把握は難しい。
公式を当てはめたら答えが出てくるように、こいつらが下心なしに
動くわけがない。直接会ったことはなかったが、実際に会って
分かった。

　あかりの容体について話している時の眼球の動き、仲間内での
小声の会話で使われる言葉がそれを物語っていた。あかりの話した
言葉が真実であるということを。悲惨な境遇ゆえ非社交的に
なった宥宗は、代償に瞬時にその人間の正体を見抜くことが
出来る能力を得た。それは超常現象的な意味合いではなく、
僅かな仕草や言葉の使い方、他者への接し方を総合的に判断する
能力。経験に基づいた行動心理学。外れたことは一度もない。
これ以上傷つきたくないという本能に根ざした力が、彼らの偽善を
告げていた。この程度で恩を売るつもりかと、宥宗の怒りが
増すだけであった。

　研究室メンバーが帰り、一人残った山瀬は、照子にいかに

あかりとの思い出をほぼ捏造して話して聞かせた。現実から乖離した
作り話。あかりが意識を取り戻し真実を話すなどとは露ほども
思っていないことが分かる。まして宥宗が自身のこれまでの悪行を
全て知っているなどとは、想像すらしていないようだ。それどころか
あの悪夢の夜、携帯で話していた会話を宥宗に聞かれたかどうか
ばかりを気にして、遠まわしに尋ねては、妙な説明を加えてきた。

「雑誌に投稿する原稿の締め切りの話をしていたら、足が
機材に当たった」という白々しい言い訳。なるほど「もうすぐ終わる」
の解釈をそっちへ持っていったのか。

全く疑惑は晴れなかったが、山瀬が焦っていることだけは
宥宗は即座に理解した。一点の曇りもないのであれば、余分な
言葉を足す必要などないはずだ。いずれにせよ本性を知っている
宥宗にとって、山瀬の言葉は唯の不快音に過ぎない。そこに
真実も重みも存在しない。生返事をすると勝手に「誤解」が解けたと
判断したのか、山瀬は浮かれて「少し私が変わりましょう」
などと殊勝なことを言っているが、山瀬などが病室にいたら
殺される可能性すらある。絶対的に信用ならなかった。

宥宗との経緯はともかく、少なくともあかりに対しては山瀬を
面倒見の良い教師であると信じている照子は、礼を言って必要なものを
買いに行った。前回の一件を思い出し、宥宗は口数少なく、不快さを
隠そうともしなかった。

だが他方で山瀬の真意を知りたい。
前回の来訪時に薬袋を返却し、携帯をくすねていったように、
何か意図があるはずだ。密室に一人きりになったときに、山瀬は
どんな行動をするのか。また何か尻尾を出す行動をするかもしれない。
いざとなれば病室に踏み込めばいいと、宥宗は一旦泳がす
ことにする。売店に行くと言って、病室を出たふりをして
身を隠しドアと廊下の壁の間の隙間から山瀬を観察することに
する。宥宗は開けられている側ではなく、蝶番のある側の隙間から
覗くことにした。

山瀬は確認するかのように辺りを見回し始めた。怪しい。
気取られぬように念のため足を忍ばせて横の共同洗面所に身を
隠す。聞き耳を立てていると、山瀬は廊下にまで出てきて人影を
確認している。前回の携帯の件で学習したのだろう。
だが共同洗面所までは入ってくることはなかった。山瀬の足音は
部屋の中へ戻っていく。十分な間隔を開けて宥宗も、物音に
気をつけながら元のドアの裏側にまで戻る。

山瀬は懐から何か取り出すと、鞄の内側のポケットに
入れた。

（やっぱり。……携帯だ）

　無言で病室に駆けこむと、驚愕する山瀬を無視して宥宗は携帯を
確認する。あかりが倒れたあの日、宥宗とやりとりした記録が全て消去
されていた。まさかと思い、それまでの交信記録で、山瀬による度重なる
嫌がらせについて書かれた記録をチェックしたが、それも全て……。

ないことが動かぬ証拠となり、宥宗は頭に血が上った。調査の段取り、
証拠の保全それらが頭から抜け落ち、激情に駆られるがままに証拠の
薬袋を突き付け、山瀬が故意に隠したことを糾弾した。

「……何をしていたんですか？」

口から発せられた怒気を孕んだ低い声は、内面の叫びを含んでいた。

「な、何のことだい？」

「惚けるな。……一体何をしていたんですか？　携帯から証拠を消して
いたのではないですか - 違いますか？」

山瀬は一瞬はっとした顔をしたが、何も答えなかった。
目を逸らして、あらぬ方向を見て知らんふりを決め込む。その様子が
宥宗の怒りをヒートアップさせる。これまで内密に調査する為に気を
配ってきたのに台無しになったが、それ以上に怒りが大きかった。

「薬を隠したのもあなたですよね？」

立ち上がり真正面から山瀬を見据える。

「君は一体……」

「嫌がらせだけでは足りなかったですか？　どれだけあかりさんを
傷つけたら気が済むんですか？　聞いているのはこっちだ！
早く答えろ！」

今まで面と向かって叱責される経験がなかったのだろう。もしくは
何らかのスイッチが入ったのかもしれない。「さん」づけして
しまった不覚に今更ながら気がついたが、もう止められなかった。
一方山瀬は目の前で自分を糾弾する男があかりの身内では
ないと分かり気を使う必要がないと軽んじたのかもしれない。

　山瀬は照子の前では一度も見せたことのない下卑た笑いを
口の端に浮かべ、吐き捨てるように言う。

「お前の仕業か……。研究室の評判に関わることをされて、迷惑を
受けたのはこっちの方だ」

意味が分からなかった。

次の瞬間考えるよりも先に、宥宗は山瀬の顔を思い切り顔を
殴った。「暴力を振るわれた」と大げさに痛がるふりを
している山瀬を少しも哀れと思わず、むしろ被害者ぶっているその
態度に衝動が増すだけだった。何とか一矢報いてやりたい。
それだけだった。こいつは全く反省していない。これからもしない。
だから報いを受けるべきなのだ。
これだけでは全然足りない。

　騒ぎを聞きつけた看護師に止められる。不気味に口の端を上げて
見せる山瀬。……宥宗は勝負に負けたことを悟った。状況は
宥宗に格段に不利。こいつは反省など少しもしない。被害者面して、
自分の罪をほんの少しも省みず。

「警察を呼べ」と喚いている卑劣な男よりも、自分は悪者にされる
のか。体の傷はいずれ治る。だがあかりの精神をぼろぼろにした
この男は、なぜ罪に問われないのか。悔しさが胸に迫る。

「土岐等さんの、病状に障るといけないので、騒ぐのは余所にして
頂けませんか」

凛とした声で、若い看護師が注意した。他の部屋からは比較的元気な
患者やその家族が覗きにきている。騒ぎを聞きつけた野次馬の一人が
呼んだのだろう。セミロングの黒髪を後ろにまとめ、平凡な顔立ちの
彼女も、燃え盛る職業意識がその存在感を高める。良く通る明瞭な声は、
その場を圧倒するのに十分なものであった。

「ああ、看護師さん。警察を呼んでください」

警察という言葉を聞くと、看護師は一瞬眉をひそめた。院内のことと
関係ないのに警察を呼ばれるというのは、やはり迷惑なのだろう。

「……私の一存では。看護師長に話すので、少々待って頂けますか？」

話を聞いた看護師長と医者がやってきて、まずは治療をと
診察室へ山瀬を連れていった。訴えるにしても診断書が必要でしょう
と言うと、大人しくついていく。こういう患者も多いのだろうか、
初老の看護師長の対応は実に見事なものであった。
先程の看護師がいつのまにか傍に来て、宥宗をベッドサイドの
丸椅子に座らせる。

「落ち着きましたか？　冷静に行動しないと、足元をすくわれますよ」

「……」

「大丈夫。訴えられることはありません。……でも殴っては負けです」

「はい……」

そうこうしているうちに山瀬は帰ってきた。宥宗を見て
忌々しそうに舌打ちすると、自分の鞄を手にして、そそくさと

帰っていった。

「どうして……？」

看護師に尋ねると、後ろから看護師長の声がした。

「大丈夫ですよ。……でも、いくら腹が立っても殴ったのは良く
なかったですね。これからは気を付けて、上手く立ち回らないと」

「師長が言うと説得力がありますよね」

若い看護師が茶化すと、まんざらでもなさそうに師長は言った。

「まあね。女の世界も怖いわよ」

休憩から戻ってきた照子は、事情を知ってか知らずか、
先程のことには触れずいつもの通り世間話をした。どのような
手まわしをしたのかは知れないが、先程のことは悪夢の一端かのように
現実味がなかった。明日目覚めれば忘れられる……そう甘い期待を
してしまった。だがその見通しはやはり甘すぎた。

翌日、宥宗はしっかりと制裁を受けることになる。

　一夜が明けてゼミの演習に参加した後、宥宗は指導教官である
田淵から呼び出しを受けた。この大学では、学部学生と指導教官の
関係性はそれほど密なものではない。1対1で会う機会は、就職活動や
大学院進学、留学の為に推薦状を書いてもらう時くらいだ。卒業論文も
必修ではないので、よほど熱心でない限り積極的にコンタクトを取ろうと
する学生も教師もいない。訝しく思いながら宥宗は大学院棟へ向かう。

　学部の授業を受ける棟と離れた場所にある大学院棟は、直方体の
レンガ造りの建物は歴史を感じさせる。幾度も補修を繰り返しているので、
人工的な部分と相まって独特の雰囲気を醸し出している。普段足を
踏み入れる機会がないので、指導教官の部屋を探し当てるのに、
宥旨は少々手間取った。薄暗い廊下を進むと、外観に反して味気ない
青色の無機質な扉が並んでいる。その内の一室が目的地である、指導教官
の部屋だった。

「嘉納君、困ったことをしてくれたね」

部屋に入るなり、指導教官の田淵は嘆息する。
宥宗は「困ったこと」が何を指すのか瞬時には分からなかった。
後ろの扉が音を立てて閉まったのを目で確認してから、田淵は続けた。

「君に退学勧告が出ている。身に覚えはあるだろう？」

（まさか、昨晩山瀬を叩いたことか。だが山瀬は私が学部学生をやって
いることを知らなかったはず。でもそれぐらいしか心当たりがないし、
やっぱり……）

逡巡する脳内で結ばれた顔は、一つだった。

「……山瀬先生のことですか？」

あの場では警察を呼ばれることもなかったので、もう済んだことと
思い込んでいた。確かに山瀬を殴ったのは、本当のことだ。
昨晩は警察沙汰にはしないことにしたが、気が変わることもある。
後になって警察に届け出を出すことだって可能なのだ。警察とは別に
それについて罰が下されるなら仕方がない。宥宗は潔く受け入れる
つもりだ。

ただ一つ気がかりなのは山瀬への制裁だ。宥宗が学校を放逐されれば、
もう大学内での懲罰を求めることは難しくなる。身内でない限り、
大学当局に告発することができなくなってしまう。

「全く前代未聞だよ。学生が教師を殴るなんて。君は大人しい性格だと
思っていたけれど、激情家だったんだね」

「……」

「私にも監督責任が問われている。これは提案なんだが、退学勧告の

出ている今のうちに、自分から身を引いてはどうかね？同じ退学でも
退学処分と自主退学では、後々の君の人生が変わってくると思う」

アドバイスのつもりなのか、田淵は言葉を選んで宥宗を諭しにかかる。

当然宥宗は納得ができなかった。処分を下されることに対して
ではない。

「……山瀬先生にはどのような処分が下されるのですか？」

絞り出すように声を出す。聞きたくない返答は大方予想はついている。

「君ねえ……。山瀬先生を逆恨みするのもいい加減にしなさい」

田淵は持っていたペンで目の前の紙をつつきながら、苛立つ。
大学側に再三訴えても何故か表に出てこなかった山瀬の悪行。
確かに宥宗には手を出したという非がある。だが山瀬にはそれ以上の
罪がある。

どうせ放逐されるのであれば、刺し違えてやる。

宥宗は決意した。
もう隠れるのはやめだ。
証拠は少ないが今まで用意したものがある。

「逆恨みではありません。御存じないなら説明します。山瀬先生は……」

「昨晩私に殴っただけでは飽き足りず、今度は私の誹謗中傷か。この件に
ついても学校側に報告しておくよ」

山瀬であった。あかりの声を聞きつけて、扉の向こうから機会を
伺っていたのだろう。青ざめる宥宗に、山瀬は追い打ちをかけてきた。

「処分を覚悟してくださいね。嘉納宥宗君」

「……」

やはり昨日の時点で宥宗が身内ではないことに気付いていたのか。
激昂していたとはいえ「さん」づけは迂闊だった。他人と知って調べ
あげたのだろう。あかりの携帯電話から足が付き、報復を決めたことは
想像に難くない。

「……私にも立場というものがある。嘉納君、大人しくこの退学願を
提出してくれないか」

田淵も宥宗に負けないくらいに青くなって、先程までの態度から一変。
弱々しい声で懇願してくる。無言でそれを拒絶する宥宗。田淵と
宥宗を威圧する山瀬。田淵はこれ以上面倒に巻き込まれたくないと
悟ったのか、さほど重要でもない理由を述べて席を立つ。
孤立無援で残された宥宗には、田淵が山瀬を恐れているのは簡単に
見て取れた。

学生にとっては同じ教員。だが組織に属する以上教員間にも序列は生じる。
それが分からない程あかりは世に疎い訳ではない。
それに……確かに暴行したのは懲罰の対象になる。冷静になれ。
激情に駆られては駄目だ。これは予想の範囲内。それなら……。

「分かりました。では、殴った理由を事務に説明しに行ってきます」

そのまま事務へ行こうとする。

「説明しては困ることでもあるのですか？」

同じ轍は踏まない。あくまで冷静に。
声を低く発して動揺を隠した。

「あとの処理は教授会の判断だ。君の意志も意見の必要ない」

「自分で説明します。離してください」

強引にドアノブを回し出ようとする。この男と一分一秒でも同じ時を
過ごしたくなかった。

「何を話す気だ？」

「全部です。あなたが今までした悪事を全て。僕を退学にするという
のであれば、あなたも道ずれにする」

「良いと言っているだろう！」

ばんと音がして、宥宗は壁に吹き飛ばされた。ドアと直角に
当たる壁にぶちあたり、しゃがみ込む。じんわりとした痛みを
お腹に感じて、自分が蹴られたことを悟った。蹴られる前に回した
ドアと壁の隙間から、女子学生と思い切り目が合う。

そのまま山瀬は憑かれたかのように、宥宗をサンドバッグ代わりに
容赦のない蹴りを入れる。傍に立てかけてあったパイプ椅子が
倒れかけ大きな物音を出すが、山瀬は脚を止めようとはしなかった。

宥宗はむしろチャンスと捉えた。これで自分とこの男は五分五分。
こいつも暴力を振るったのだから。蹴飛ばされた時に無意識に出した
大声と椅子の倒れる音で、隣の研究室からも、学生が野次馬に来た。
一人の学生が他の教員を連れてきたようだ。田淵は姿を現さない。
悲鳴すら聞こえない場所へ退避したようだ。

「ど、どうかされたのですか？」

若い講師は、あからさまに面倒な場に居合わせてしまったという
顔をしている。同じ学問分野のそれも一回り以上先輩を、諫める
度胸があるようには見えない。

「この学生が言いがかりを付けて殴りかかってきたのだよ。交わそうと
したら壁にぶつかって、少々大きな音が出てしまったようだ」

昨日殴られた場所を、誇らしげに指差す山瀬。宥宗は腹を抱えて
蹲りながら、丸めこまれようとする周囲の様子を慎重に見極めた。

（また人に責任を押し付けるのか……）

腹の底から怒りがマグマのように煮えたぎる。

駄目だ。落ち着け。落ち着かなくては。腹に与えられたダメージが
予想以上に重みを増して、思考を妨げる。場を読もうと意識しすぎて
いるのか、かえって意識が曖昧さを増す。その間も抜かりなく山瀬は
自己弁護を続ける。

曰く－この学生は虚言癖で周囲を困惑させるトラブルメーカーであると。
曰く－行動を嗜めるとすぐ感情的になり、昨日は逆上して殴りかかって
きたと。

「退学処分の件で、彼は興奮しているようだ。落ち着くまで待って
やって、大事にしないでやってくれ。かわいそうな子だ」

実際宥宗は腹を抱えて蹲っている。今回はどう見てもダメージを
負っているのは宥宗の方。現行犯である分、宥宗に分があるはずだ。

「違います。僕は山瀬先生に、腹を何度も蹴られました」

はっきりと主張する。なかったことにされてたまるかと、山瀬を
しっかと睨みつける。残念なことに、腹部へのダメージは外からは
分かりにくい。こっそり捲って見るが、やはり跡は付いていなかった。
人体でも柔らかい部分なので、はっきりとした外傷がつくことは
あまりないのだろう。

「私が学生の腹を蹴るような酷い人間だと思うかね？」

「……それは」

「誰か、私がそんなことをしたのを見たかね？」

講師を連れてきた女子学生は、何か言いたそうにしていたが、
結局言葉を発することはなかった。腹を蹴られた場面を目撃した
人間は、この学生だけだ。願いを込めて唯一の目撃者を見つめるが、
彼女は俯いて場を離れてしまった。

「この学生は嘘をついてまで、私を貶め、あまつさえ私に暴力をふるった。
退学処分の話が出ていると言ったら、逆切れしてこの有様だよ。これ以上
ここに居ても自分の立場が悪くなるだけだ。もう君はさっさと帰りなさい」

良くもまあこんな嘘を思いつけるものだ。良心と言う物が欠片も

見当たらない。宥宗は蹴られたお腹を大仰にさすり、山瀬の蛮行を
見せつけたが誰もそれに反応してくれるものはいなかった。

「警察沙汰にしなかっただけ、ありがたいと思いなさい」

目的を果たした山瀬は出ていった。それを見届けると鈍痛の残る腹を
抱えて宥宗は急ぎ事務へ行った。退学処分が受理されれば、大学内で
山瀬への懲戒処分を訴えることが不可能になる。

執念で休むことなく体を引きずり、宥宗は事務室まで辿りついた。
学部事務室は、メインキャンパスの一角にある。
各学部ごとに事務室が確保されているので、利用する学生の数は
分散する。それに加えてまだ入学シーズンにも早く、学部生は春休み
である為、事務室に学生の姿はなく閑散としていた。

宥宗が誰ともなしに、ハラスメントに遭ったと訴えると、事務室内が
一斉に宥宗に注目し、一瞬静寂に包まれた。
皆に視線で急かされた新人らしい男性職員が渋々対応に応じる。
だが宥宗の言い分を取り上げることなく、学生相談室に
行くよう促されただけだった。

まだ退学勧告が出されただけなので、あとは個人の判断に委ねられている事。
処分を実行するのは事務であるが、処分の決定権は教授会にあることを
口早に説明される。

職員は奥から学生相談室の案内のパンフレットを持ってくると、宥宗に
手渡し裏表紙の地図を指差す。

「申し訳ありませんが、事務ではそういった相談を扱っておりません。
ここの学生相談室でお願いします」

　宥宗がドアを出ようとすると、背後で待ちきれないかのように
一斉に声を抑えた情報交換が起こる。「……」無言で睨みつけると、
またぴたりと止む。噂の主になるのはそもそも気分が良いものではない。
だがそれ以上に、この事務室での反応は、待ち受けているであろう
組織の対応を暗示しているように見えて、何とも不吉で後味の悪い
ものであった。

だが既に賽は投げられた。
前へ進むしか道はない。
宥宗はおぼつかなくなる足元を意識して前に進め、下唇を噛みしめた。

　学生相談室は、 他の建物から離れた記念会館の中にある。周囲には
少数のクラブハウスがあるだけの、いわば構内の離れ小島。相談者が
入室するのを加害者に気取られないよう 配慮しているのかもしれない。

メインキャンパスから離れているので、道すがら学生達の喧騒が小さく
なっていく。それが逆に安心できる。強がっていたが先程 までの山瀬との
攻防は、思っている以上に自分の心身に影響を与えたのだと思い知る。

学生相談室のある小高い丘を切り開いて作られた記念会館は、丘の頂上に
位置する。その為そこに行き着くまでには、上り坂を登りきらなければ
ならない。階段ではないが急な勾配は、腹部への衝撃を受けた宥宗に
とっては厳しい。途中に思い出したように設置されているベンチを頼りに、
気力を振り絞る。

　記念会館は創立者の偉業 を称えて創られたもので、通常は数少ない
観光客くらいしか訪れない。だがパーティー会場や式典ホールも内部に
設置されているので、三月のこの時期は謝恩会 や卒業式関連の予定で
埋め尽くされている。それでもまだ午後に差し掛かろうかという
今の時刻に、謝恩会が予定されるはずもなく、坂道に人通りは少ない。

人通りもない坂道はアスファルトで固められているが、周囲の芝生には
手が入れられその奥には以前からの樹木が残されている。その樹木に
住まう小鳥たちが囀る 声が青空に吸い込まれ、僅かに薫る木々の薫りが
清々しい。脂汗をまだ冷たい風が攫っていく。宥宗は腹を押さえながら、
そっと深呼吸をしてみた。

「あれ、嘉納？　大丈夫？　体調悪そうだけど。腹痛いのか？」

宥宗と同じ田淵ゼミの 沢渡だ。なぜこんな場所にと訝しく思ったが、
沢渡の手にしている楽器のケースを見て思い出した。ブラスバンド部か
何か音楽の部活に入っていてこの時期は忙しいと、ゼミで 零していた
ことを思い出した。音楽関連の部活やサークルは、近隣に騒音で迷惑を
かけぬよう記念館横のクラブハウスに集められている。坂を下ってきた
という ことは、今しがたまで部活動の練習をしていたのだろう。

　沢渡はゼミでは宥宗と同じく大人しい部類にはいるが、しっかり
者で多忙を理由に課題を遅らせたことは一度もない。関節の伸縮性に
優れているパンツを好み、少し染めた長髪も常に１つにきっちりと纏めて
いるところからも、何事にも「機能性」を重視する沢渡の性格を良く
あらわしていると言える。一重で平坦な鼻は地味にも見えるが、
気遣いが自然とできる沢渡の性分を知っていると、親しみ深く感じる
に十分な愛嬌を持っていた。経験上、他人と壁を作りがちな宥宗に
対しても、押しつけではない自然な関係性を宥宗のペースに合わせて
創り出してきた。友情に疎い宥宗は未だにそれを「友情」と呼んで
いいのか戸惑っていた。今まで「みんな」に自分が含まれていた試しが
ないのだから。

「……沢渡君？　ああ。ちょっと腹が痛いんだ」

斜め前方の、アスファルトに映えている雑草に視線を定めて宥宗は言う。
顔を見ては感情がこぼれ出しそうだ。

それを抑えるために視線を外す。
沢渡は宥宗の直ぐ横に座ると、自分のバッグからハンカチを取り出し
額に浮いた汗を拭いてくれた。

「本当に大丈夫か？　俺、整腸剤なら持っているけれど要る？
水筒にお茶もあるから、今飲んでみるか？」

宥宗は迷った。沢渡に事情を話してしまおうかと。
でも。もしかしたらまた。
いや沢渡は信じてもいいのでないか。
いやそれ以前に沢渡に迷惑がかかるのではないか。
迷った。

迷った末に宥宗が発した言葉。それは。

「ありがとう。大丈夫」

言いながら宥宗は鞄を手にする。余計なことを話さないよう、
宥宗は場を離れることに決めた。

「本当に大丈夫か？顔なんて真っ青だ。上に行くなら、俺付いていくよ。
心配だから」

立ち上がる宥宗と共に、体を起こす沢渡を宥宗は少し困った
ように見上げる。身長は宥宗の方が高いが、お腹をガードして前のめりに
なっているので少し坂の高い位置にいる沢渡を見上げる格好になる。

「……何か用事があって降りて来たんだろ？　僕なら大丈夫だから。
心配してくれてありがとう。それじゃあ」

一方的に宥宗は話を進め、会話を切り上げた。沢渡は「でも」とか
宥宗を案じる言葉をもごもご言っていたが、既に数歩先を進んでいる
宥宗にそれ以上しつこく絡んでくることはなかった。

数秒してから沢渡が「じゃあ、気を付けて。何かあったら俺すぐ
坂を上ってくるから」と言い残して、ゆっくりと坂の下へ靴の音が
遠ざかっていくのを 宥宗は背中で聞いた。

これで良い。そう信じたい。背で沢渡の気配を探りつつも、宥宗は
一度も振り返ろうとはしなかった。

やっと辿り着いた記念館は白を基調とした外観が、陽光に映えている。
屋根は紺色で空と建物との境界線を引いている。入学式以来のその建物は、
入学したての希望に満ちた記憶を想起させて、悲しみが深くなる。
記念館の入り口に入った宥宗は思わず足を止めて放心してしまった。

疲れもあり、我知らず数分の間放心していると、どこからか聞こえる
足音で現実に引き戻された。足音は遠い。誰かに見られていた訳でも
ないのに、今の放心状態を何者かに見られていたような気がして、必要
以上に動作をきびきびとするよう意識する。

入口にある館内案内図で再度学生相談室の場所を確認すると、なかなか
治まることの無い鈍痛を圧して相談室のドアをノックした。中から聞こえ
たのは、良く通るはきはきとした年輪を重ねた女性の声だった。包み込む
ような優しげな声を期待していた宥宗は、少し気圧されたが、意を決して
ドアを開けた。中にいたのはセミショートの髪を茶色に染めた女性。
年の頃は山瀬と同じくらいか。紫の単色セーターと黒のパンツという
シンプルな服装は、きびきびと行動する彼女にぴったりのようだった。
野坂と名乗り、手慣れた所作で椅子を勧め、話を促す。

宥宗は一連の事の顛末を語る。だがまだ完全に信用したわけではない。
宥宗は既に幾度もこの相談室に訴えたが、事を荒立てない方が利口だと
繰り返すだけだったのだ。業を煮やして証拠を持って行っても、渋々
行われた学内調査委員会が出した結論は「感情の行き違い」。山瀬には
いかなる処分も下されなかった。だが今回は人命が失われそうになったのだ。
薬も携帯も状況証拠しかないが、あかりからの携帯メールの内容は全て
保存してある。宥宗も退学勧告を出され、先程など山瀬からひどく
蹴りつけられた。今度こそ、この件は重大なアカデミック・ハラスメント
事例に当たると判断されることを期待する。

まずは自分の所属と名前を言わされることに、以前は違和感を覚えた。
匿名性がないということは、報復をおそれる被害者がこの相談室を利用
する際のハードルとなっている。相談員は外部のカウンセラーではなく、
大学に雇用されている教職員の担当者である為、その可能性は十分
考えられるからだ。だが今現在報復を企図している宥宗にとっては、
もう障害にはなりえなかった。

「土岐等さんがそんなことになっていたとは知りませんでした……」

殊勝な顔をして見せる相談員の同情心に期待する。宥宗は畳みかける
ように退学勧告の取り消しが出来ないか打診する。だがここでも昨晩の
出来事が尾を引いた。

「でも先生を殴ったのは確かなのでしょう？　暴行というのは退学処分の
要件に該当するんです。処分の不当を訴えるのは難しいでしょうね」

そう言って、退学処分の要件について明記された学内規則を見せてくれた。
頭に血が上ってやってしまったことは、大きな代償をもたらした。あの
若い看護師の言葉の通り。殴ったら負け。その通りだ。それは自覚
している。だが。

「それなら、山瀬先生も懲戒免職ですよね。僕を何度も蹴飛ばしたのですから
傷害罪にもあたります」

意識的に腹を触りながら確認する。

「それが本当なら当然そうなります。目撃者はいるのですか？」

「います。通りがかった女子学生がいました」

「その方は証人になってくれそうですか？」

「それは……」

彼女は山瀬の報復を恐れて、場をこっそり去った。あの様子では
関わり合いになるのは拒否するだろう。研究棟にいたのであれば、
彼女の今後の人生は 教授陣に握られているも同然なのだから。
間接的に事情を聞いたであろう若い講師も、自分の進退を賭けてまで
宥宗に味方してくれるとは期待できなかった。
山瀬は当然否認するだろう。

「それではあなただけが、蹴られたと言っているだけなのですね」

「だったら、俺が殴ったというのだって山瀬先生一人が言っていること
ですよ」

「あなたご自身で殴ったことを認めていたではないですか」

「……」

宥宗は激昂の余り殴ったことに、罪悪感を僅かなりにも持っていた。
それ故隠さずに自分の非は認めてきた。山瀬ほど厚顔無恥にはなりきれ
なかった。その甘さが命取りとなっている。山瀬を叩いたことに、
宥宗は後悔していない。山瀬のしてきた非道な行いへの、当然の
報復だと認識している。

だが衆目の支持を得られない手段をとったことは愚かだった。
この相談員との会話は、後から記録に付けられる。
また不利な材料を提供してしまった。

「それでは、土岐等さんの件はどうなるんですか？」

「その件はもう調停委員会で結論が出ました。1度行われた案件は二度と
扱われません」

つまらない規則が学生の泣き寝入りに大きく貢献している。
無実の加害者疑惑の教員を救うという意図があるのなら、それこそ
再審理も可能にするべきだ。

「今回は別件です。意図的であれば殺人未遂ですよ」

「しかしあなたの見つけた状況証拠だけでは、取り上げるのは難しい
でしょうね。元々あなたは山瀬先生を怨んでいた訳ですから。証言の
信憑性に疑問が残ります。土岐等さんの空白の一時間にしても、
全てあなたの推測に過ぎませんし。下手したら名誉棄損になりますよ」

いちいちもっともであるが、何ともそっけない対応に感じる。
相談員とはもっと相談者に共感するものではないのか？
宥宗の不信感は募る。

「それでは、山瀬先生はこれだけ酷い事をしておいて何のペナルティも
なしですか。そして僕は黙って退学処分に甘んじろと」

宥宗は怒りで声が上ずりながら言う。

「私も力になりたいんだけれど……。先に手を出したのはあなただし
状況は不利だわ。土岐等さんのことも、もう調査委員会の結論が出ている
しね。あなたの為の調査委員会を申請したとしても、その間に
退学処分が決定されてしまったら、もう復学は無理なの。だから今回は
自主退学という形をとるというのが、一番現実的だと思う。
自主退学なら　復学も可能だし。今回はそういうことにしておいたら？」

泣き寝入りを進めるのか。学内の機関が、学内の人間を裁くのには
やはり限界がある。

「じゃあ、この足で警察に向かいます。構いませんよね。大学が頼りに
ならないんだから」

バッグをもって立ち上がると、野坂は急に慌てだした。「警察」の
二文字が効いたのだろう。学内では処分が下ったとしても重くて停職
数カ月。それなら実刑を受ければいいのだ。頼りにならない大学の
規則になど従う謂われはない。

警察に訴えても証拠不十分で取り上げられないだの、大学には自治が
あるので内部でことを収めるべきだとか、野坂は宥めにかかったが、
宥宗の心に響くことはなかった。

「大学に自治があるというのであれば、その信頼に足る働きをして下さい。
問題教授の一人も解雇できない大学に、自治など存在しません」

自分の説得に耳を貸してもらえなかった野坂は苛立ち、捨て台詞を
吐いた。

「それくらいのこと社会にでればいくらでもあります。乗り越えられ
ないようであれば、上手く立ち回れなかった人が駄目なんです」

耳を疑った。いくらでもあることなら、それは糺す必要はないのか。
あってはならないことを放置している大学側に問題はないのか。
信じられない言葉に振り返った宥宗が目にした野坂の顔は、先程までの
人の良さそうな印象を覆め冷たく硬い表情しか読み取れなかった。

大学長ごとうは帰宅と言い捨てた後、会話さえ聞いてくれなかった。
これが野坂の本音か。

あかりの問題がいつまで経っても解決しない理由が分かった。
大学は信用できない。警察か無料法律相談に駆け込んだ方が得策だ。
一刻一秒を争うと言うのに時間を浪費しただけだった。

「もう結構です」

怒気を含んだ声を最後に、宥宗は今度こそ部屋を後にした。

腐った学び舎を囲む空気は想像以上に凝っていた。
自主退学はしない。理不尽な決定に従う謂われはない。
だが退学処分は確実。

俯きながら辿る帰路は、重く遠い。
その間、緩慢な動作とは対照的に頭をフル回転させる。

どう転んでも悪い結末しか予測できない。
自主退学をすれば、大学に通うため必死で貯蓄した二年の学費が
無駄になり、専門職への道は閉ざされる。

田淵も宥宗を見捨て保身に走った。
就職活動をしても、退学という経歴は大きな障害となる。
目覚めないあかり。
失われた物が大きすぎて、地面に付けている両方の足ですら何とも
心もとない。

痛む腹をさすりながら、メインキャンパスに戻ると大学院棟の前に
人だかりができ、赤いランプが点滅している。近づくにつれそれが
パトカーであることと、山瀬や田淵の所属する研究棟に横付けされて
いる事が分かった。

何が起こったが知りたい気持ちと裏腹に、蹴られた瞬間の山瀬の鬼の
形相を忘れたいというアンビバレントな気持ちが入り混じる。
態度を決めかねつつ、とりあえずそちらへ歩みを進める。
のたりのたりと腹を押さえながら向かっていくと、警察官が二人
研究棟から出てきてパトカーに颯爽と乗り込み、いなくなってしまった。
集まっていた暇な学生たちも四散していく。

結局何だったのだと、学生たちに混ざって正門へ向かうと、聞くとも
なしに学生達の声が耳に入る。一人は事情通。もう一人は途中で合流した
ようだ。

「誰かの研究室で盗難事件の容疑者がいたらしいぜ」

「はあ？　置き引きなんてよくあることだろ？　警察呼んでいるところ
なんて初めて見た。そんなに大事なものだったのか？」

「何かの薬とか警察が言っていたけれど。あの学科で薬なんか使うか？
でもまあ大事なものだから、警察が来るんだろ」

「おいおい、それって麻薬とか？　だったらヤバいんじゃね？
大学院生が麻薬とか、絶対ワイドショーでもちきりになるぜ。で、
犯人はどうなったんだよ？　捕まったのか？」

「警察しか出てこなかったからな。見つからなかったんじゃないの？
ま、何にせよ珍しい物が見られたな」

お気楽大学生二人は飽きたのかすぐに話題を変え、今から行く合コンの
話を嬉々として始めた。盗難事件……。アカハラがそういう目に見える

形の犯罪であったらもっと被害者への共感も上がるのだろうか。

つらつらと考えている間も、腹痛で足取りの重い宥宗は二人から徐々に
距離が遠くなる。思ったよりもダメージが深刻なようだ。耐えきれなくて
途中にあるベンチで休む。そこは門に近いものの、健康センターの裏側
なので前に見える芝生の美しさにも関わらず、周囲に人は少ない。座ると
鈍痛が位置を変え、新たな痛みを伝えてくる。体中から汗が吹き出し、
腹や額がぬるぬるして気持ち悪い。

痛みを堪えている間に、気付くと宥宗は見知らぬ者たちに取り
囲まれていた。女性一人に男性3人。あかりの研究室の学生たちだ。
そのうちの一人は、例の最初に発作が再発したときに文句を言った学生
だった。嫌な予感で血の気が引いた。そもそも奴らは宥宗の顔を
知らない筈だ。あかりの入院先に来た時も、顔を見られぬよう細心の
注意を払っていたのだから。

「あなたが嘉納君？」

女の問いに、宥宗は明らかに不審そうな目線を返した。正直今は
人の相手をする余裕などない。声も出せず、結果問いかけに無視をする
形となる。

「……」

それを是と受け取った四人は話を続ける。

「山瀬先生はあなたの退学勧告を撤回してもいいと言っています。
その代わりこの誓約書に押印をして欲しいと」

ぎょっとして顔を上げる。先程までの傲慢なまでの強気から一転。
何が山瀬の心境を変えたのか。

差し出された誓約書には退学処分を取り下げる代わりに、二度と
今回の件を蒸し返さないと言う趣旨が書かれていた。答えるまでもない。

「拒否します」

腹に力が入らず、宥宗の声はかすれ、小さい。だがもみ消しは
許さないという強い意思を視線で伝えた。これではあかりは救われない。

「後悔しますよ。損して得取れという言葉もあります。あえて波風を
立てるよりも、ここは一旦我慢してさっさと卒業するのが利口という
ものです。その為に今まで勉強をしてきたのでしょう？」

脅迫ともとれる言葉を女は堂々と言ってのけた。

「無理です。あの男を許すことはできません」

もうあんな卑劣な男に先生と敬称を付けたくはなかった。
これが賢い選択ではないことは、頭の隅で理解している。報復を恐れて、
とりあえず組織から抜け出るまで我慢するのは、アカデミック・ハラス

メントの被害者が取るオーソドックスな手段だ。あかりの一件があってから、
宥宗は日本中の事例を当たったのだ。同時に分かったのは、学内で
下される処分の甘さ。停職数カ月というのがほとんどという現実。

セクシュアル・ハラスメントに関する社会的に認知されてきたが、
パワーハラスメントの一種としてのアカデミック・ハラスメントと言えば
そうでもない。通常のパワーハラスメントであれば、嫌がらせされて
いる間も少なくとも会社から給料は発生する。だが学生の場合、
むしろ金を払って嫌がらせを受けに行っているようなものだ。しかも
専攻が将来に直結する場合は、理不尽な教師であっても我慢し卒業する
しかなくなってしまう。専門職であれば卒業後も、その教授が影響力を
行使してくることがある。裁判になって事を荒立てれば、その教授の
落ち度に目を瞑り騒ぎ立てたことを理由に被害者はトラブルメーカーと
みなされる。泣き寝入りが多いのが現状だ。

救いようがない。

これ以上話すことはないと、鞄を手にしようとすると男の一人がそれを
押さえつける。それをきっかけに各々が事前にローテーションでも組んで
いたかのように、あかりと宥宗の悪口を言い始めた。低レベルな言い訳へも、
鈍痛で反論すら難しい。心の中で反駁するに留まる。

「些細なことを大げさに捉えて、被害者ぶる」
（全部記録して専門家に見せたが、誰もが納得する人権侵害行為でしたよ。
もちろんお前たちが普段していたこともな）
「先生が指導でしたことを何でも悪く捉える」
（アカデミック・ハラスメントの言い訳の典型例だな。同じ行動をした
他大学の教授は懲戒処分を受けているというのに）
「元々才能がないのを逆恨みしている」
（調停員会でも内容は水準に達している事が、確認されたことを知らない
のか）

気持ちでは戦えるが、腹痛で言葉がでない。宥宗が無言なのを
いいことに、言いたい放題言った。宥宗に対しても暴力男（これは
事実だが）、逆恨みと罵り、あかりに対しても山瀬のストーカーなどと
言い放った。最後の言葉の意味が分からず言い分を聞いていると、山瀬に
相手にしてもらえないので、あかりが嫌がらせの為に宥宗と組んでいると
ありえない妄想推理を聞かされた。

これが山瀬の言い分なのか、彼らのオリジナルなのかは分からないが、
事実無根なことには変わりはなかった。自分のことであれば我慢できる
が、あかりの事に関しては本気で怒りが湧く。こんなつまらない連中に
将来を壊されたのかと思うと悔しい。全員見た目は小奇麗にしているが、
話の内容の酷さから、その顔は醜悪に歪んでいた。殊に女の態度は武将が
戦功を競うがごとく猛々しさで、宥宗に接してくる。その顔に
塗りたくったファンデーションの下には、得体の知れない戦果への執心が
色濃く出ていて、醜悪さを際立たせる。欲に歪んだ人間の顔はかくも
醜いものか。

その上これほどの罵詈雑言を吐いておいて、大学に残らせてやると
いう上から目線。これでどうして宥宗が要求を飲むと期待できるのか
不思議だった。これ以上不快感が広がるのは御免だと鞄をひったくるように
奪い取ると、宥宗はその場を離れることにする。事実腹だけでなく、
気分も悪い。後ろから女がヒステリックに喚く声がするが、どうでも
良かった。所詮学部生には手を出せない筈だ。用向きを果たせず山瀬に

叱責され仲間割れでもすればいい。人がいる場所へ行けば、吊るし上げも出来まい。正門への階段をそろそろと降りる。

　だが彼らはしつこかった。その要求は飲めないし、印鑑も持っていないという宥宗に執拗に拇印での押印を強要する。女は相変わらず後ろで喚いていたが、男たちは一転して懇願して泣き落としにかかる。各々山瀬に何か弱みでも握られているのだろうが、今までこいつらがしてきたことを知っている宥宗には全く効かない。哀れとは思うが、自業自得だとも思う。構わず階段を下りていくと、焦った男子学生が無理やり腕を取ろうとする。抵抗するとどんと背中に衝撃が走った。景色がゆっくりと回転していく。

　男子学生が、自分のしでかしたことの重大さに今更ながらに青ざめている。鞄を抑えたのと同一人物だ。音を立てて落ちていく宥宗を、まるで化け物のように恐れ彼らは逃げていった。急勾配の階段であった為、全身のダメージは大きい。宥宗の意識は次第に遠のいていった。

宥宗が徐々に意識を取り戻した頃、外はもう夜の帳が下りていた。
蹲ったまま通行人に助けを求めようと待っていたが、死角になっていて
誰も来ない。結局宥宗は回復するのを待って自力で起き上がり、歩いて
帰路についた。

警察。
訴訟。
本来なら一学生が関わる必要がないはずの機関へ訴え出ることに、
理不尽を感じる。
それに先に手を出してしまった負い目がある。またもやそれが不利に
働くのではないか。
そしてそれ以上に腹が痛む。

休息が必要だった。あの悪魔のような連中と渡り合うには、
闇雲に正面突破するのでは駄目だ。情報と資金が必要だ。
十分休息をとってから、策を練らなくては。
一刻の猶予もない状況に絶望は深く思考に沈み、確実に意欲を奪い
無力感が支配していく。

今度こそ宥宗は打ちのめされていた。今までの人生も苦難の連続で
あったが、全身を駆け巡る鋭い痛みが、今日一日の出来事の集大成として
その惨さを訴える。

肩から背中、足に至るまで全身が痛むので、こころなしか腹の痛みが
弱まった気がすることだけが唯一の救いだ。どのみち退学は免れ得ないので、
無理をおしてタクシーに乗ることを諦め、引きずるように歩く体は、
春に向けて浮き立つ町並みから浮き出ていた。義務のように歩を進めれば、
今日の出来事が誘発剤となり過去の悪夢が思い出される。

記憶を手繰り寄せても、「楽しい」と体感した経験は皆無だった。
そんなはずはないとしたり顔で諭す本などもあるが、本当に何一つ
なかったのだ。

顔も碌に見たことの無い父親。
体裁ばかりを気にして、意に添わなければすぐ暴力に訴える母親。

陰湿な嫌がらせを繰り返された学生時代。
財産を巡り、未成年であるあかりを容赦なく追い込む親族たち。
そして教育者以前に人として欠けている山瀬とそれを庇う大学‐。
目を覚まさないあかり。

ただ搾取されるだけの人生に意味があるとは思えなかった。それでも
「開けぬ夜はない」という根拠の無い言葉をなんとなく信じて、ひたすら
生きてきた。そして得られた結果がこれだ。絶望するなと言う方が
どうかしている。本当は死ぬ勇気がなかっただけだという事実に、
もっと早く気付くべきだったのだ。

（消えたい……）
自死ではなく、初めから存在しなかったことにして欲しい。
もう疲れた。こんな腐った世の中、生きていて何になる？　元々死ぬのを
先延ばしにして、だらだらと生きていたようなものだ。だから、もう
十分だ。

宥宗にとって死はいつも隣に寄り添う、最後に残された救いだった。
語られる言葉は希望を呼び起こし、生き地獄の中で積み上げてきた
ささやかな善行は、真偽も分からぬまま縋る死後の為‐。

死と共に歩んできた宥宗は、その導きに魅かれつつも、冷えた
頭の隅にある機械は冷静に駆動している。視野を広げ、いつものように
自分を殺せば、道はいくらでもある。幾百と絶望を繰り返して分かったこと。
必要なのは確認。いつでも渦中の縁から手を切ることが出来ると確かめる
こと。準備をすることで、荒れた心は不思議と凪いでいく。

明日が来るのも恐ろしくなる‐そんな日は。
宥宗はしめやかに支度を始める。
堪え切れず支度に手をつけたこともある。
ーそう結局勇気がなかっただけなのだ。

真昼間の繁華街を歩けば、同じ年頃の男女がおしゃれをして楽しそうに
連れと愚にもつかない話をしている。透明なスクリーン越しに見るように、
彼らは宥宗にとっては、映画の中と同じくらい現実味がなかった。
だが吹き付ける風の寒さに同じく身震いするのを見てやはり同じ世界に
生きているのだと、再認識する。同じ世界でも与えられるのは苦しみだけ
かと、宥宗は嘆息する。

宥宗と彼らのどこが違うというのか。人間は二つに分かれる。戯れに
人を傷つけようと、理不尽な不満をこぼそうと許される人間と、彼らからの
理不尽な仕打ちを耐えることを強いられる人間。なぜ宥宗は、宥宗は
許されないのか。些細な、そしてほとんど言いがかりのような理由を付けては
嫌がらせをする最低な人間がなぜ許され、もてはやされるのか？

「何か、辛いことでもありましたか？」

不穏な顔で世を怨んでいると、いきなり道路脇から話しかけられた。
振り返ると草臥れた着物を着て、ひっつめ髪の年齢不詳の女が目の前の
テーブルに肘をついて、得意顔で指摘してきた。目の下の皺があるのに、
大きな眼に宿る強い光は無垢な子どものそれにも似て、相手の認識を
撹乱する。ごちゃごちゃと得体の知れない物を置いたテーブルには、
「占い」と書いてあった。

女は頼んでもいないのに何やら手元の竹肥後のようなものを操り
瞑想すると、重々しく前世の悪業が今現れていると告げた。
だからその報いを受けているのだと。

「……で？」

何を売りつける腹積りなのか。典型的な詐欺ぶりに、宥宗は馬鹿
らしくて聴く耳すらもてない。だったら、現世で悪業をふりまいている輩は、
来世まで何一つ報い を受けることなく幸せに今生を生きるということか。
不快感をあらわにした表情にもめげず、占い師は話を無理にでも続け
ようとする。同時に妙な本を傍らのハンドバックから取り出すのを
宥宗は見逃さなかった。

「善行を積むのが一番なんだけれどね。少しでもカルマを早く……」

「だったら現世でやったことは、今生では返ってこないのか？　だったら
今やりたい放題やっても大丈夫ということか。来世なんてどうせ記憶なんて
ないのだから」

真面目に答えるのも馬鹿馬鹿しいが、一連の災厄につい声を荒げてしまう。
宥宗は運命、神、この世の道理全てに対する憤りが頂点に達していた。
そんな自分をどこか上空で客観的に見ている自分もいて、余計に自己
嫌悪が増す。

「因果応報というものがあって、目には見えなくてもいつか悪業は跳ね
返ってくるようになっているのです。だから辛いことがあっても」

最後まで聴く意味はなかった。因果応報がないことなど、この占い師
以上に自分が良く知っている。宥宗は確信していた。

「あなたは随分と幸せな人生だったんですね」

これ以上語るべきことも、聴くべきこともなかった。

この厭世感は一時的なものかもしれない。やがて流されぬるま湯を
漂うような生を続ける。今までもそうだった。だが宥宗がこの世に
心底うんざりしている事は真実だ。とっくの昔に「普通の幸せ」を
諦めてしまったから、望み自体あまりない。唯一にして最大の願いは
「普通の人」になることだが、どうやったらなれるのか未だ分からない。
とにかく耐えるだけの人生から脱却したかった。だから自ら望むという
境遇が分からないのだ。周囲との隔たりは年ごとに増し、それはもう
埋められない程で。

満たされたことがないから、普通の人の望む幸せなんて異次元に等しい。
あかりのことがなければ、この世に執着も未練も何一つなかった。自殺は
悲しむ人がいるというけれど、幸い宥宗には心配する友人もいない。

一瞬沢渡の顔が思い浮かんだが、所詮一週間に一度の縋るには脆すぎる
関係性。家族は……心配する理由がない。唯一の希望である宥宗も
目を覚まさない。念のためと自分を言い聞かせ、死出の旅路の準備をする。
いっそ消えてしまうのだと思うと、この汚れた世界でさえ少しは惜しく
見えてくるものだ。宥宗のなかの冷静な部分が、心働きを先読みして
させていることなのかもしれない。

宥宗を囲む状況と対照的に、空は快晴だった。

（こんな日まで空は青いのか）

宥宗は青空が大嫌いだった。圧倒的な拒絶感を思い知らされる。
青空が似合うもの。友人との海水浴。仲間との山登り。家族で行楽。
それらは別世界の住人だけに許されるもの。
初めから異次元のものと思えば羨ましくもない。
そうやって自尊心を守ってきた。

まだ陽が高い時間に戻った家は、空とは対照的に陰気に満ちていた。
これが宥宗の住む世界。光り輝く世界と同時に存在するが、決して
相容れない陰鬱な空間。常に修繕を絶やさない外観は、青い空に良く
映えた美しい洋館。無断で写真を撮る人間も尽きることないその表向きも、
内幕を見れば「美しい」という表現とかけ離れたものを想像する。

人間の本音と建前以上にそれは隔絶していた。母の治療費以外は全て、
自分の奨学金で賄うことが決められていた宥宗には、この無駄に広い
邸宅の修繕を継続的にすることなど出来なかった。外観だけは代々地元を
収めてきた一族の沽券にかかわるのか、親族が出してくれたが、それ
以外は全て－。

掃除だけは欠かさないので清潔さは保たれているが、それが逆に
がらんとした殺風景な印象を見る者に持たせる。せめて音をとテレビを
付け、最後の始末を完全な物にするため、ネットで情報を確認する。
なまじ複雑な家庭に育った為、手続きが面倒なことこの上ない。
人生で万人が褒められるのは結婚式と葬式だと言うが、今まさに未来を
絶とうと言う宥宗には、葬式しかない。人生の最後の大舞台の為に
は念を入れる必要があった。一通り調べ終わり、ついでにいつもの習慣で
メールをチェックすると予想通り、退学処分を検討している旨の事務

連絡があった。仕事が早いなと、宥宗は苦笑する。

それともう一つ－大学のメールマガジンだ。
大学内のイベントやニュースだけでなく、資格試験や就職に関する情報も
含まれるので毎週チェックしている。大学経営の宣伝ツールでもあるので、
幾分現実よりも見栄えを良くしていることを差し引いても、メール
マガジンが届ける学生のあるべきキャンパスライフが自分とはかけ離れ
すぎていて、その隔たりに宥宗は時折胸が詰まる。ただこれが届けられる
のももう最後だろうと、クリックした。
すると一面に出てきたのは－山瀬の造ったような笑顔だった。

記事の題名は学生への相談業務について。内容はしごく一般常識程度の
話で、専門家としてこの男を呼ぶ必要性は分からなかった。そもそも専門
からかけ離れている。だが山瀬の下に書かれた人物紹介を見てその謎は
判明した。現在の職業に加えて新学期以降を着任期日として「ハラスメント
相談室室長」と書いてあった。
悪い冗談としか思えない。

　今は三月だから、ハラスメント委員会が宥宗の訴えを受理したとしても、
山瀬がハラスメント相談室室長としての権威を振りかざすことは明白だ。
相談員が、何とか山瀬のハラスメント問題を隠蔽しようとする態度の
謎が解けた。

ハラスメント委員会は、ハラスメント相談所の引き受けた案件の中から、
申請者の申し立てがあったハラスメント案件を扱う委員会で、教員の中から
選出された委員によって構成される。

山瀬が代表となった以上、調査に要する教員の選出も山瀬が大きな決定権を
持つだろう。山瀬に有利に事が運ばれるのは一目瞭然だった。
土台大学構成員が、同じ構成員を裁くのに公平性を求めるのは不可能という
ことか。

　インタビュー記事の脇には、わざとらしい笑みを貼りつけた山瀬の
顔が掲載されて吐きそうになる。それでも記事から目を離すことができない。
あの卑劣漢がどんなたわごとを言っているのか。必ずや自分を絶望に落とす
ものだと了解しているのに、クリックを押して記事を拾うことが
辞められない。ホラー映画で行ってはいけないと分かっている場所へ
向かう、登場人物の気持ちに近いのかもしれない。

　予想裏切らず、次々に現れる偽善の言葉の数々。ユーモアを交えつつ
自身のアピールも忘れないその能力は、まさしくコミュニケーション・スキル
の達人。コミュニケーションが自身の伝えたいことを、意図を確実に果たす
ことであるとするなら、山瀬は玄人だ。そこでは意図の善し悪しを
判断することは無意味なのかもしれない。不快感が焦燥に変わり、
黒い蟠りを打ち消す答えを求めるかのように宥宗は、記事を追う。

　極めつけはインタビュー最後の科白。宥宗は聞き流すことが出来なかった。

「大学は常に学生の味方です」

驚愕。呆気。そして諦観。
この男の外面が良いことなど分かっていた。だがこうも見事に演じ
きっているところを見れば、やはり怒りは再燃する。

（恥ずかしげもなくよくも）

怒気は熱を孕み出所を探し、体を循環する。熱は深層の奥底まで一気に達し、
厭世感を溶かしていく。消えかかっていた本能が呼び起こされ、宥宗は
憑かれたように情報を探し始めた。山瀬に処罰を下す方法を。
学内に拘る必要はない。公の場所に引きずり出してやればいいのだ。

差し込むような腹痛が、宥宗を襲った。幾度も鈍い痛みを感じてはいた。
だが見た目はあざなど何もなかったので、憎しみに駆られて結局宥宗は
医者には行かなかった。
（痛い、耐えられない）
今まで感じたことがないほどの痛みで、生まれて初めて救急車を呼ぶ。

緊急手術の後告げられたのは、内臓の一部機能を失ったという事実だった。

医師の勧めで警察に暴行の被害届を出したものの、院生全員の口封じが
既に終わっており、山瀬は終始宥宗の狂言であるとまくしたてた。
医師の診断書を見せると、一転して今度は新犯人を究明すると言いだす。
馬鹿らしい。犯人はお前だと何度も言っているのに、奴らはスケープゴートを
なんとか用意する腹積もりのようだった。
ちょうど時同じくして大きな事件があったこともあり詳しい調査を経ない
まま、山瀬が起訴されることは結局なかった。

　もし山瀬のハラスメントさえなければ。あかりは内定していた会社に
入社できていた。昨年も理不尽な理由で論文の受け取りを拒否されたものの、
その会社はもう一年待ってくれる度量のある会社だ。あかりの能力を
買っての判断。ハラスメントで卒業年度が遅れなければ、さぞ充実した
社会生活を今頃送っていたことだろう。ストレスの元凶と離れれば、
発作も治まり、今の病状にはならなかったのかも知れない。
全部仮定の話だが、宥宗は考えずにはいられない。

　他人には心を開けない宥宗であったが、あかりと出会い、自分が信頼する
人間への愛情の示し方を日々学んできた。だがそれももう。

「殺してやる。僕にはもう失うものなんてない。死ぬ前にあいつも道ずれに」

病院の無機質な白い天井を見ながら、宥宗は固く決意した。

ルルルルルル。

突如、病室に携帯電話の着信音が鳴り響いた。
運ばれている間痛みで、病院内だというのに携帯電話の電源を
落とすのを失念していた。

珍しいなと訝しく思った宥宗は、出るのを一瞬躊躇った。普段
携帯電話をかけてくるのはあかりとバイト先、セールス。稀に‐。
いやこのタイミングなら大学からかもしれない。もうどうせ死ぬ身だ。
覚悟を決めたら気が楽になり、もし奴らだったとしたら冥土の土産にと
今まで我慢して来たことをぶちまけよう。

決意して携帯の画面を覗くと、照子の名前が表示された。
待ち受け画面を確認すると、メールと着信がそれぞれ二件。
いずれも照子からだ。急用でもあったのかとかけ直す。

「嘉納君？　あかりが！あかりが！」

興奮で声が上ずる照子の声を、白昼夢の中で遠い昔の映画を見ているような
現実味のない感覚で宥宗は聞いていた。

　その日宥宗は照子と二人、高い煙突から揺らめく命の煙証が空へ
吸い込まれて行くのを見つめていた。

　呆気ない。人の命とはこれほどまでに簡単なものなのか。そこに意味を
見出すこと、その為に生涯をかけること。無常観が寂寥と相まって、
息苦しくなる。郊外の火葬場は大都市に近いこともあってそこそこ盛況で
あったが、一連の儀式を終え隣接する墓場に移動すれば静けさが支配する
死人たちの領域だ。

「学校でひと悶着あったみたいね」

ぽつりと照子が言った。世間話のつもりか、泣きつくしても声すら出ない
宥宗に、かける言葉が他に見当たらなかったのか。煙の行方を目で
追っていた宥宗は、急に現実に引き戻されても、頭が付いていかなかった。
悲しみに浸っていても何一つ状況は変わらない。天は自分に試練しか与えない。
だから今度は自らうってでなくては。

「……」

どういう経路でどんな内容で、あの事件が伝わったのか。内容によっては
照子まで敵に回してしまうのか。なんとも悲しくなった。人が離れていく
なんて日常茶飯事。気にすることはない。だが、今は－。死ぬ前に一人でも
自分のことを悪く思わない人間が居てほしかった。あかりが目を覚まさない今、
それは照子だけで。その照子すらまた。絶望感に思わず目頭が熱くなる。

「結論から言うと、私は山瀬先生の言うことは信じていないの。あかりの
　お見舞いに来てくれていた様子で、十分嘉納君の人となりはわかった
　つもり。ただ学校で何かあったのは確かみたいだから、気になって」

「……」

　宥宗の人となりを信じてくれたということか。それとも宥宗と
山瀬とのやり取りを聞いていた看護師から何か聞いたのだろうか。
宥宗の記憶の中では、山瀬は自身の正体が露見せぬよう細心の注意を
払っていて、照子もうまく乗せられていた風であった。そのまま信じていた
のではなかったのか。

「あかりを思ってのことだとしても、嘉納君がいきなり先生に殴りかかる
ようなことはあり得ないと思う。何か理由があるのでしょう？ だから
山瀬先生の言うことは嘘だと思っているの。ただそんな嘘をなぜ吐かなければ
ならなかったのかを……ずっと考えていたの。何か想像を超えるような
良くないことに、嘉納君が巻き込まれているのではないか……とても
……心配なの」

「心配」

この2文字を他人が。自分に。あかり以外に初めて自分を心配してくれた人間。
あかりの母親だというのに、それでも宥宗は本当に信頼していいものか、

決めかねていた。長年にわたる他人への不信感は、いつまでも拭えない。
この人は本当に裏切らないのか。これは自分を懐柔しようとしているだけでは
ないのか。宥宗は考えあぐねていた。

「……言いたくないなら言わなくてもいいわよ。でもいつでも聞く人がいる
ことだけは思い出してね」

餓えていた言葉を、心づもりもないままに投げかけられ反射的にと俯く。
自分でも理由が分からなかった。照子は黙って背中を撫でる。それでも
心の底から気持ちを預けることが出来ない自分を持て余し、宥宗の頭は
纏まらない。

泣くほどに鼻の奥からせり上がるツンとしたどこか懐かしい匂い。感情に
任せてただ宥宗は涙を流した。落ち着くまで照子は無言で背中や頭を撫でて
くれた。そして宥宗の慟哭が落ち着くと、優しく待たせている車に乗るよう
促した。振り返るといつから待っているのか、あかりの祖父浩輔が運転席で
あくびをしながら待っていた。

照子はあえて後部座席の隣に座って、とりとめのない話をそっと投げかける。
話を続けながらも照子は宥宗の背を撫で続けてくれる。そうか普通の母親は
こんな風で。温かくて何とも居心地が良い。口を開けばまたこみ上げて
来そうで押し黙っている宥宗の代わりに、運転席の浩輔が返答する。
娘を、そして宥宗を思いやるその言葉にはちゃんと血が通っていて。

本心を打ち明けてしまいそうだ。そんなこと今更……。宥宗は心の芯を
持たなければと気合を入れた。油断をすれば絆されて、何もかも洗いざらい
話したいという衝動に駆られてしまう。でもこればかりは、流されては
ならない。結果的にこの人たちを巻き込んでしまう。自分だけが自分を
救うことが出来る。人の助けなど不要だ。今までそれで来たじゃないか。

「いつでも私たちを頼ってくれていいんだよ。無理にとは言わないが、
私らくらいに年齢になると、頼られると嬉しいものなんだ。私はこんな
性格だからな。本心しか言わない」

「お父さん、昔から頑固だけど馬鹿正直だから」

ふふふと茶化す照子も、「私も同じ気持ち。いつまでも待っているから」と
真剣な眼差しで言った。が、直ぐに表情をふんわりと和らげて「気楽にね」
と一言添えた。

またもあの懐かしい感覚と共に、一気に涙が溢れだした。またも背中を
さすってくれ照子。浩輔は「ちょっとドライブでもするか」とハンドルを
切った。

そのまま彼らの優しさに身を任せるように、宥宗は堰を切ったかの
ように、あの研究室で起こった事件の顛末を全て話す。浩輔は怒りハンドル
さばきが荒くなる。照子は一緒に涙を流した。

「嘉納君は、一人で戦っていてくれたんだな。ありがとう」
二人はこれからあかりの祖母ユメも交えて、今後の対策を練ると言った。
二人は宥宗を疑わなかった。宥宗の言葉をそのまま真実と。宥宗が
宥宗であることが信頼の証と、そう受け取ってくれた。それだけでもう

十分だった。

自分に言い聞かせている間に、車は自宅へ到着した。礼を言って降りようと
すると、追い縋るように照子は言った。

「また、会えるわよね？」

追いすがるように背中に声をかける照子に、宥宗は振り向いて
目を見据え、はっきりと答えた。

「ええ、そう願います」

本心からそう言った。

　翌週には大学事務局を通して、あかりの家族に対する説明の場が
公式に設けられた。

とは言っても大学側はあくまでマスコミに嗅ぎつけられぬよう細心の
注意を払っていた。公式とは言っても、あくまで大学内部での話であり、
外部に漏らすつもりはないという意思の表れだ。

そして出された答えは、アカデミック・ハラスメントの事実確認を
したところ、あかりや宥宗対するハラスメント加害者は一院生による
ものであり、その院生は既に退学処分にしたというものであった。

山瀬に対する責任追及をすれば、一転して事実無根であり、これ以上の
追求は名誉棄損にあたると主張する大学側。
提出した証拠も返却はせず、責任を持って廃棄するの一点張りだった。

浩輔が途中で山瀬の顔に、グラスの水をかける一幕もあったが、
結局大学側は山瀬の非を一切認めず、裁判を起こしても何ら証拠も
ないから、そちらが不利になるだけだと申し開きをしただけだった。

　照子からの携帯メールで一部始終を知った宥宗は、計画を実行に移す
ことにした。だがもう怒りにうち震えることはない。こうなることは目に
見えていた。なにせあの男がハラスメント相談所の室長をしているのだ。
もみ消しは当たり前。むしろそれを目当てに専門でもないくせに室長を
引き受けたのだろう。だからこそ話すのを躊躇った。

だが万分の一の可能性に賭けたのだ。宥宗の知っている他人は、
皆大なり小なり山瀬と同じ利己的かつ打算的。信頼など置くべくもない
敵ばかりだった。だが宥宗の家族と出会い、そういう人間だけではない。
宥宗の今までの環境が異常であったのだと信じたかった。この世が
実はちゃんと見ている人がいると見直したい。
そうすれば変われる気がする。そう思った。だがやはり地獄は地獄。
異質なのはあかりの家族たち善良な人間の方なのだ。それなら。

　とっくに切った電話を目に映しながらも、思考に憎しみが渦巻く。
渦はうねりを増し、その勢いを増していく。うねりは固い決意へと
収斂していく。以前とは違いそのうねりを客観視し、収斂したものを
冷静に形作っていく。

直ぐにその足で照子たちは法律事務所を訪れたが、大学ぐるみでの
隠蔽がなされていることに対する証拠保全は難しく、勝訴したとしても
小額の慰謝料が取れるだけ。しかも山瀬を懲戒免職にできるのは大学
だけで、法的に強要することはできないと言われたと、照子は珍しく
沈んだ声で打ち明けた。

大学も警察も、法律も駄目となると、最後に残された方法は一つだけ。
予想されていた道は、悲嘆も義憤も既に乗り越えている。

　準備を済ませると宥宗は、夜陰に紛れて町へと向かった。既に
山瀬の住所は把握している。途中で家の明かりを確認できる場所にある
喫茶店もチェック済みだ。会見で退席して以降山瀬は、マスコミを
恐れているのか授業も休講が続いている。

海外に逃げ出していない限り家にいるはずだ。八時以降に犬の
散歩をするのは、既に娘のブログから割り出している。喫茶店で薄い
コーヒーで喉の渇きを潤し、そろそろと思われる頃、山瀬の家から人影が
出てきた。

　勘定を済ませ、急いで後を付ける。山瀬は人気の無い開発地域に
向かっているので、人目を気にする必要はほとんどなかった。途中の小さな
ひらけた場所にある公園のドッグランに犬を離すと、山瀬はドッグラン内に
あるベンチに座り、伸びをした。

（油断しきっている。今がチャンスだ）

鞄から包丁を取り出す。自分を狙う者の存在に気付いていない今は、
絶好の機会だ。冷静に。着実に。後ろから。
自分に言い聞かせ、距離を詰めていく。

「嘉納君」

ふいに背後から肩に手を置かれた。
前だけに意識を集中していたので、宥宗の全身が強張る。
おそるおそる振り向くと、浩輔が立っていた。斜め後ろには照子も
控えている。

「……随分心配したのよ。嘉納君、あれから全然電話に出なかったから」

「……」

宥宗が「準備」に邁進している間、照子はずっと電話をかけていてくれた。
だが宥宗は、その都度フォローをする携帯メールを返信したはずだ。
礼儀も内容も無難なはず。それなのに、どうして。
それも後始末に入っていたはずなのに。

「本心かどうか、それぐらいは分かる。私たちを見くびらないで欲しい」

浩輔は強い調子で明言した。
今夜は宥宗の今後について、話に来たのだと言う。家を出たあたりから
様子がおかしかったので、悪いとは思ったが後をつけたと言った。
こうしている間に手にした包丁は、浩輔祖父の手に渡っていた。

「こんなことをしても、あかりは喜ばないわ。もっと自分の人生を大切にして。
悔しいけれど、今回のことは忘れて嘉納君には幸せになって欲しい」

正論だ。分かっている。宥宗と同じくらい、いやそれ以上に悔しいのは
あかりの家族だ。でも絶対にまだ視界にいるあの卑怯な男は、これから
何十年経とうと改心など絶対にしない。因果応報も訪れない。愛犬と家族、
「物分かりの良い」同僚に囲まれて幸福に生きる。

この心根のきれいな人たちには分からない魑魅魍魎の世界に生きてきた
宥宗には、分かりすぎるほど分かっていた。
所詮惨めさを託つのは、やられた方だけ。
やった方は忘却するか、自らを本気で正しいことをしたと信じて増長
するだけ。だから、報復が絶対に必要なのだ。思い知らせてやらなければ。

これは正義の行い。たとえ法に触れようと、この世に因果をもたらすために
不可欠なことなのだ。

「止めないでください」

自分でもぞっとするほど低い声が出た。頭は明瞭に冴えわたっていて、
決して一時の激情などではない。まだ鞄に予備のナイフは用意してある。

「駄目！」

後ろから母親が抱きついてきた。

「行かせない。嘉納君が不幸になるのが分かって、行かせること
なんて出来ない」

照子自身を人質に取られてしまっては、宥宗はどうすることも
できなかった。

これがあかりの研究室の院生であれば、殺してでも道を開けた。
だがこの人たちは、山瀬ではなく宥宗の身を本気で案じてくれている。

「あの男を殺して、僕も死にます。……だから、その後なんてないんです」

「あんな男の為に、自分の人生を諦ることはない。嘉納君が幸せになる
ことが、最高の復讐だ」

浩輔も涙を流していた。照子も泣いている。自分がこの良い人たちを
悲しませていることが、何とも情けなかった。
ただでさえこの人たちは、あかりのことで悲しんでいるというのに。

遠くに見える仇は、全くこちらの様子に気づかないまま愛犬にリードを
つけようと奮闘している。走れば直ぐに届く距離だ。
今決着を付ければ簡単じゃないか。今殺さないで何が出来よう？

それでも宥宗は、照子を自分から引き剥がすことはできなかった。
どうしても。
できなかった。

宥宗には希望も、力も、金も何もない。
あの男を殺すことも出来ない。
こんなにも憎い敵に、自分はあまりに無力だ。
からんと、宥宗は無意識にサバイバルナイフを手から落とした。

未だ後ろから抱きついている照子ごと地面に崩れ落ち、宥宗は悲嘆に
くれた。枯れ果てた筈の涙が、じんわりと眼の奥を湿らせる。
頭上では、白く光る月だけが淀んだ下界を清めていた。